940.28
D74
⑦
940. 28-D74ウ
1200500759982

ゲ

ディルタイ

佐久間政一譯

始

ゲーテ

940.28
D74
⑦

ディルタイ

佐久間政一譯

夏目書店刊

1007
49

譯者序

本書はヴィルヘルム・ディルタイ(Wilhelm Dilthey) 原著の『體驗と詩作』(Das Erlebnis und die Dichtung)中の『ゲエテと詩的想像』(Goethe und die dichterische Phantasie) なる一論文を、この書の第四版(一九一二)によりて邦譯したるものである。但し書名は書肆の希望により、簡約して『ゲエテ』となした。

ディルタイ教授の名は、既に我邦の學界に喧傳されて居るから、その傳記を玆に紹介する必要もあるまいが、念の爲極めて簡短に誌して置く。――彼は千八百三十三年十一月十九日、ヴィースバーデン市の近くなるビーブリヒ(Biebrich) に生れ、ゲティンゲンやベルリーンで神學・哲學・史學を修め、後教授としてバーゼル、キール、ブ

レスラウの諸大學を經て、千八百八十二年以降千九百六年までベルリーン大學に勤務し、千九百十一年十月一日ティロールのザイス(Seis)で物故した。その廣汎なる研究は精神科學の諸方面に亘り、その學の特徴は所謂「生の哲學」として知られて居るが、その根本態度は生を生そのものより解釋し、生に卽して生を捕捉し、全き人間を理解することによつて、精神生活を闡明し・記述し・これが諸型を確立し、その發達を追究せんとするところにある。從つて生の內面的・直接的體驗が基礎となり、直觀・內經驗・非合理主義的方法等が重んぜられ、概念的・理知的の方法は排擊される。そして生の諸關聯と歷史的規定とに、その觀察の重點が置かれるのである。――この態度、この方法は本書が極めて明瞭に示して居る。

著書饒多、其全集は千九百二十二年以來刊行され、全七卷に達して居る。このうちで著名なるものは『シュライエルマヘル傳』(Leben Schleiermachers 1870)、『精神科學序說』(Einleitung in die Geisteswissenschaften 1883)、『精神科學に於ける歷史的世界の構造』(Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften 1907) 等々である。

『體驗と詩作』は千九百五年に初版を出し、千九百十年の第二版・第三版に於て、之に數多の補修を加へた。第四版以後は、著者の物故によりて舊版を套襲して居るが、既に十數版に達したらうと思ふ。此書はディルタイの文藝觀を闡明したものでし文藝學に於ける新らしい精神史的方向に甚大なる影響を與へた。そして此方面から觀ると『ゲエテと詩的想像』の一文は、正に卷中の白眉である。

譯者は昭和八年九月、『詩と體驗』(この名稱も書肆の希望に依る。)と題して、全卷を譯出したが、執筆中突然激烈なる神經痛に襲はれ、意氣頓に衰へ、且一方では印刷の進行中なりし爲推敲また思ふに任せず、從つて意に滿たざるところ頗る多く、これが改訂は年來の熱望であつたが、今やその一部を改訂して出版し得るに至つたのは、譯者の幸慶とするところである。

惟ふにディルタイは、稀世の碩學であり、卓れたる詩人である。碩學であるが故に能く古今の哲人・科學者・論客を理解し、詩人であるが故に、能く詩歌を色讀し、その微妙にして幽玄なる韻律に心耳を傾ける。精神生活が彼の如くに豐富深遠ならざる者が、彼の所說を遺漏なく理解することは、眞に至難の業であらねばならぬ。ディルタイ飜譯の第一難關は實にこゝに存するのである。

ディルタイの行文は、時に平明簡素、綠野を貫いて行く一條の河流の如く、時に錯綜紛糾、谿流の滯つて激湍となる趣がある。且つ文章法上の表現も、詞類の驅使も、必ずしも通常の文法に從はない。從つて讀者がディルタイを、その意味に於て完全に追體驗するにあらざれば、いづれとも斷言し難き表現に接すること、決して少くはない。これまたディルタイ飜譯上の一難關である。

譯者は本書改修に當つても、これらの難關を突破すべく少なからざる勞力を費した。然し譯者の淺學菲才を以てしては、所期の目標に到達するには途なほ遠しの感がある。切に江湖諸賢の叱正と垂敎とに俟つ。

なほ本書の改修にあたりては、昭和十年出版の服部正巳氏の譯書を讀了し少なからざる啓發を受けた。記して同氏に敬意を表すると共に、譯文の作成と出版とに關して、多大の援助を與へられたる吹田順助君・成田秀三君及び鹿子木女史に甚大の謝意を致すものである。

昭和二十一年四月十八日

南總姉ヶ崎に於て

譯者誌

附記

固有名詞又は難解なる譯語或は表現の下には、括弧に依る二行組の私註を加へ、また長文を要する註は、別行にして細かく組んだ。本文中に挿入せる一行組の括弧註は、理解に便ぜんが爲、原著になかりしものを、譯者が加へた部分である。あらゆるものがなの感があるかも知れないが、一に明解を期した爲である。

目次

譯者序……一
序……一
生……七
詩的想像……一三
ゲエテの詩的想像……二七
體驗と詩……四三
シェークスピア……五三
ルソー……八三
ゲエテ……九六

序

いづれの不死なるものに、
こよなき譽は與へらるべき？
われ何人とも爭はず
されどわれは、神ユピターの
永久に働き
常に新たなる
奇しき娘
この神の愛兒なる
ファンダズィーに贈らん。

—ゲエテ—

（千七百八十年作『わが女神』の起句。――譯者註）

詩人のファンタズィー即ち[1]想像、體驗されたる現實の及び傳承の素材並びに以前の詩人たちの創作せるものに對するこれの[2]關係、及びこの創作する想像の、並びにかゝる關係より生ずる詩的作品の特殊なる[3]根本形態――これらはあらゆる文學史の中心點である。いづれの近代獨逸詩人にありても、ゲエテにありての如く、詩的創作に於ける想像のこの中心的位置が明瞭になつて居るものはなく、またその人を理解する爲に、想像の本質への洞察を、ゲエテ（理解の場合）ほどに必要とするものはない。これぞゲエテが歐洲文學の關聯のうちに占むる位置に基づくものである。

私はこの書の卷頭（完書『體驗と詩』の卷頭を示す。――譯者註）に於て、近代科學の成立によつて規定された歐洲文學の動きを敍述した。この動きは、ゲエテが生れたときには、既に一世紀半も持續した居たのであつた。これの影響の下にゲエテは生長し、このものの成果の總和が、ゲエテのうちに作用し續けた。彼を圍繞するものは、獨逸の啓蒙主義であつた。

ゲエテが詩作し初めたときには、レシングはその活動の峰頂に立つて居た。獨逸の全歷史によつて規定せられたるこの思潮の最も特殊的な方向を、ゲエテは自らのうちに採り入れた。即ちこれは、人間が自己自身に、また人間の普遍的本質の理想とするものに沈潛する事であつた。然し彼の歷史的な使命は、啓蒙主義の偉大なる諸收穫にしつかりと根づきながらも、詩作の或新しい時代を導き上げる事に存した。この新しい時代が獨逸國に生れたのである。ゲエテと浪漫主義とは離れ難きものとして相提携して、抽象的悟性の支配とより、詩的想像を解放することに、到るところで助け合つた。諸國に於ける此新らしい時代に對する準備を、――例へば英吉利の天才論、佛蘭西のルソー、獨逸のハーマン、ヘルデル及シュトゥルム・ウント・ドラング（Sturm und Drang 疾風怒濤時代又は天才時代と譯される。千七百六十七年―千七百八十年頃の一時代を云ふ。――譯者註）を何人が知らないであらうか？ゲエテはこの運動によつて運び出されたのである。然し新しい詩作そのものは、ゲエテの作品であつた。そして彼の詩的想像と啓蒙主義との闘爭、否寧ろ當時の科學精神

そのものとの闘爭は、文學史上比類なき眺めであつた。

されば、ゲエテを理解せんとする多種多樣にして、また卓越せる諸般の試みの後に出でて、私が普遍的定則より出發して、まづゲエテの詩的想像の力と特性とに透徹すべく努め、かくして得られたる諸々の見地からして、初めて彼の生涯の事業を觀察する事は、恐らく不正當ではないであらう。

科學的勞作、哲學的思索、行政方面の活動などが、ゲエテの生涯の事業中、廣濶な場所を占めて居た。これらのものは單に彼の詩的創作の長い休止期間を充塡したばかりではなく、彼がその文學的使命を遂ぐるために必要としたる生と世界との解明の爲に缺くべからざるものであつた。そして啓蒙主義を科學的に克服することのみが、彼の詩的世界のために、彼に對して自由なる進路を拓き得たのであつた。

彼の全方面的なる創造力は、その中心點を彼の想像の裡に持つた。これは彼自身が屢々陳述したところであるが、之を最も明かに述べたのは、彼が伊太利滯在とシラー

との交際とによつて、自己自身に就て明瞭なる意識に達した頃であつた。千七百八十八年ゲエテ（時に齢三十九才。—譯者註）は自分自身に關して、羅馬に於ける諸經驗の綜括內容をかう云ひ表はして居る。「私はこの一年半の孤獨生活のうちに私自身を再發見した。然しそれはいかなるものとしてであつたか？——藝術家として（の私）である」と。かくしてまた、シラーとの共同制作の時代に、彼自身の性格描寫が出來た。「いつも活動的な內面へも外部へも働きつゞけた詩的形成慾（考へ、或じ又は見聞するものを詩的に形づくることとの衝動。——譯者註）こそ、彼の生存の中心點であり、基底である。このものを掴んで仕舞へば、他の一見矛盾と思はれるすべての點は解決される。この形成慾は休むことがないから、材料の盡きるまでもわれとわが身を食（は）み盡さぬ爲には、それは外部に向はざるを得ない。」と、彼は自己について談つて居る。この自己告白は、造形美術や活動生活や諸科學に彼自らの關係する所以を、外部へ働かうとする彼自身の形成力のかゝる努力から說き來るのである。これらの活動は、彼が遂に自己の眞の天職を全く確實に認識せりと信じたる當時に於

ては、「間違つた諸傾向」だと彼自身には思はれた。然し客觀的傍觀者は、寧ろシラーと共に云ふであらう。これらの活動は、全然新しい種類の文學的畢生事業に對する廣大なる基礎をなしたものであり、この事業と人格の形成とは全然分離しがたく結びついて居たのであると。さればゲエテの座席は、偉大なる自然研究者や哲人や或は政治家たちの間に在つたのではなくて、エーシュロスやダンテやシエークスピアの傍らに存するのである。

生

詩（ポエズイー）は生の描寫であり表現である。それは體驗を表現し、生の外面的現實を描寫する。私は生の諸相を私の讀者たちの記憶裡に喚び起すべく試みよう。生に於ては、私の自我は、それの環境のうちで、私に與へられて居る。卽ち私の存在の感じや、私の周圍に於ける人間と事物とに對する或態度と或立場の決定となどが與へられて居る。これらの人物又は事物は、私に或壓迫を與へ、或は私に力と生存の喜びとを供給する。それらは私に種々の要求をする。そして私の存在の裡に或場所を占める。かくして各事物、各人物は私の生活關係から、或特殊の力と着彩とを受け取る、出生と死とによつて劃界せられ、現實の壓迫によつて局限せられたる生存の有限性は、永續するもの

・變化なきもの・事物の壓迫から免れたるものに對する憧憬の念を、私のうちに喚びさます。そして私の仰ぎ見る星辰は私にとつては、上敍の永遠にして觸れ難い世界の表徴となるのである。私は私を圍繞するすべてのものに於て、私自身の既に經驗したものを追體驗(ナハエルレベーン)する。私は夕闇のなかに立つて私の脚下に在る靜かなる町を見下ろす。家々に相次いで點ぜられる燈火は、私にとつては保護されたる・平和なる生活の表現である。私自身の裡にある・私の境涯のうちに存する・又私の周圍の人間と事物とのうちに存在する生のこの內實こそは、それらのものの力の價値を形成するもので、これは、それらものの働きによつてそれらに歸せらるる諸々の價値とは區別される。

そして詩作がまづ第一に示すものは、この生の價値であつて、その外の何物でもない。詩作の對象は、認識する精神に對して存在するが如き現實ではなくて、種々なる生の關係に於て現はれ來る私自身の及び事物の性質狀態である。この點からして、叙情詩又は物語は、そもいかなるものをわれらに見せるのであるか——又それらのものにとり、何が存在しないかが說明される。然しながら、生の諸價値は、生の關聯そのもの、のうちに基礎づけられたる相互關係の裡に存する。この諸價値が、人物・事物・狀態・事件にそれの意味を與へるのである。されば詩人は意味豐かなるものに向ふ。かくして記憶や、生の經驗や、それらのものの思想內實が、生と價値と意味豐充とのこの關聯を、類型的なものに高め、事件がかくして或普遍的なものの代表者となり、表徴となり、(意志の)諸目標と(最高の)財とが諸々の理想となる(理想が努力や憧憬の目標となり、最高の財貨となるの義。——譯者註)のであるが、詩作のこの普遍的內實のうちにも、現實の或認識は云ひあらはされて居ないで、生の意味に於けるわれらの生活諸關係の聯關に就ての最潑溂たる經驗が云ひあらはされて居るのである。この經驗以外には、詩的作品の何等の理念もなく、詩作が實現すべき何等の美的價値も存在しない。

これぞ生と詩との間の根本關係であつて、詩(ポエヂイー)のあらゆる歷史的形態は、この根本關係に左右されるのである。

さてゲエテの詩作が、體驗の異常なる活力より生長する事は、彼の詩作の第一の而して最も決定的な特質である。さればゲエテは、全然異種的な成分として、啓蒙文學へ踏み込むのであるから、レシングすら彼を評價し得なかつたのである。ゲエテの氣分は一切の現實的なるものを改造し、ゲエテの激情は狀態及び事物の意味と形態とを、異常なるものに高める。そして彼の小休みなき形成慾は、自己の周圍のすべてのものを、形態や形像に變ずるのである。彼の生活と彼の詩作とは、この點で區別はない。彼の書翰は彼の詩と全く同じく、この特質を示して居る。そしてこの區別はゲエテの諸書翰と、シラーのそれらとを比較するいづれの人にも明かに解る筈である。さればこの點に於て、既にゲエテの詩は全然啓蒙文學より分離して居る。

「生のうちには、かくて想像裡に働らく諸々の力が包含されて居るのである。

詩的想像

一

ファンタズィー——即ち想像は一つの不思議なものとして、又人間の日常の營みとは全く異つた一現象として、われらの前に現はれる。然しそれは或種の人々の有するより強力なる組織に過ぎざるもので、この組織は一定の根元的過程の稀有なる強力さのうちに基礎づけられてゐる。これらの根元的過程から出發して、精神生活は、それの普遍的法則に從つて進展し、日常平凡なるものとは全く異つた形態に、自らを築き上げるのである。

知覺が同時的の諸感覺から、空間に於ける形態を築き上げ、或は感覺の連續から、律動（リズム）や旋律（メロディ）や音的形像を作り上げるときに、既にそこに詩人の特性が現はれる。とりわけ詩人の內面では、本源的な力を以て、彼の生の諸關係・氣分・激情などが、知覺構成に働きかけるのである。

記憶心像は、個人の異なるに從つて、その他の條件が同一であつても明るさと强さ、明白性と具象性との全く相異なれる程度を持つ。色なく音なき影としての表象から、瞑目した視界のうちに描き出される人物事物の諸形態に至るまでの間には、再現（作用）の全く相異なる諸形式の一系列が伸びて居る。さて叙述する詩の天分[1]と、再現されたる・或は自由に創造されたる表象に明確性と極めて鮮かな分明性とを保持し、または與ふる異常なる能力[2]とは、互に結びついて居る。蓋し詩人が形態として思惟するには、その基礎として、分明なるものや、鋭く輪廓づけられたる諸形像の運動を、到るところで必要とするからである。この思惟はまた同時に、既に得たる印象の充實と、

記憶心像の完全とを要求する。されば詩人はまた大抵、すばらしい物語作者である。

さて蒐集された經驗と、自由に創造する想像との間の關係、諸種の形態、事態及運命の再現と、それらのものの創造との間の關係は、如何なるものであらうか？　或與へられたる結合に於ける諸要素を、再び表象に呼び返へす聯合（アソツイアツイオーン）（又聯想とも云はれる。——譯者註）と、與へられたる諸要素から、新らしい諸結合を作り出す想像力とは、互に極めて明瞭な境界線によつて分たれて居るやうに見える。これらの二個の偉大なる心的事實の眞の關係を研究するに當りては、說明的假說のいさゝかも混入せざる記述的方法を適用することが必要である。かくしてのみ、詩（ポオイー）の歷史家に、文學を理解する爲には、日常生活の粗大なる觀念の代りに、心理學のより精細なる洞察を使用すべき信念が生じ得るのである。

われらによりて把捉され得る心的經過に於ては、同一表象が或意識のうちに還り來ることがないと同じく、第二の意識のうちに、全く同一の表象として再び現はれるこ

ともない。新しい春が來ても、それが樹々の上に去年の葉を再び私に見せることのないやうに、過ぎにし日の表象が、今日の日に再び呼び覺まされることはない。たゞ恐らくより暗く、或はより不分明に表はれるに過ぎまい。——われらが同一位置にとゞまりながら、或對象を自らのうちに捉へ終りたる眼を閉ざし、そして知覺の變じて出來た表象が、かくしてなほ、それの最高の強さと明瞭性とを所有する場合に、この記憶殘像のうちには、知覺過程の中に含まれて居た諸要素中、纔かに一部しか表象されないのである。たゞ一個の魂なき・死せる記憶しか生じないこの場合でも既に、全形像を喚び戻さうとする努力に際して、或模作の試みの存することは紛れもなく明白である。——然しながら知覺と表象との間に、他の形像が既に入り込んで仕舞ひ、そしてわれらが、今や知覺を完全に喚び戻すべく努力する場合には、憶ひ起されたる表象は、或一定の內的觀點から築き上げられたのである。この憶ひ出されたる表象は、この場合、知覺中、殘存せる實量(容內)から、現存の諸條件が必然的に伴ひ來るだけの分

量の要素を、構築材料として採り用ゐるのである。そしてこれら現存の諸條件は、現在の心的狀態への關係によりて、類似又は對照の委で、この形像にそれの感情的照明を賦與するのである。例へば極めて苦しい不安の時期に於ては、嘗つての平和ではあつたが喜悅の無かつた狀態の形像が、極めて輝かしい平和の至福の島のやうに、われらの前に浮び上がるかも知れない。否、全然間違つた表象が築き上げられることは稀れではない。さて最後に、われらは大抵個々の印象——それの回想は、一個の瞬間像として、或一定の知覺作用に關係するのであるが——を喚び戻さうとは努力しないで、諸表象又は表象の諸結合——それの各は對象を、われらの知覺したる凡べての狀態に於て代表する——を喚び戻さうと努めるのであるが、この場合、かやうな表象の構築は、生氣なき再現からはなほ更より遠く離れて居り、藝術的模作の構築になほより多く近づくのである。——簡言すれば、記憶に基づかざる想像力はなく、想像力の一側面を自らのうちに包有せざる記憶は存在しない。回想は同時に變容(メタモルフオーゼ)である。そし

て此認識は、心的生活の最根元的な諸過程と、われらの創造能力の最高の作業との間の關聯を明瞭ならしめる。この認識はまた、夫の多趣多樣にして、あらゆる點で全く個性的なる・且たゞ一回だけかやうな有樣で存在する・動搖的な精神生活そのものの起源を一瞥せしむるものであつて、この精神生活の最優れたる表現が、藝術的想像の不朽の創作品なのである。再現それ自身は、一個の構成過程である。

されば この方面から見ての詩人の心的組織は、既に知覺・記憶・再現の簡單なる諸過程が强力なる事の中に現はれて居る。——これらの過程によりて、極めて多樣なる種類の形像が、卽ち性格・運命・場面などが、意識のうちに動くのであるが。——次にわれらは記憶そのもののうちに、これが想像力に近似する一側面を發見する。卽ち變容がわれらの心裡なる諸形像の全生活を通じて支配して居る事がそれである。これは視覺現象中の注目すべき諸現象に於てもまた現はれる。睡眠に陷る前に眼を閉じた時、そこに現はれる極めて簡單なる現象を、何人が樂しまなかつたらうか？ 落着いた・敏感なる視覺のうちには、內部的な器官的刺戟が、今や光線となり、波立つ霧となつて現はれる。そしてこれらのものの中から、或目的の共働することなしに、——これはわれらが反對に、純粹にして極めて平靜なる觀照に沈潛して居るからである、——輝ける多彩なる空想形像があらはれ、これらの形像は不斷の變化を續けるのである。

回想に於て生ずる諸形像及具象的諸關聯の變容は、然したゞ想像の特徵を示す構成過程中最簡單なる・夫故にまた最も多敎示的な場合に過ぎない。增進しつゝ、減退しつゝ、普遍化しつゝ、分彙しつゝ、類型を造りつゝ、造形し變形しつゝ、或は無意識的に、或は恣意的に、——かくしてこれらの構成過程は無數の新しい直觀形態を生み出すのである。諸形像の有する若干の個所は取り除かれ、他の個所は增强せられ、直觀は記憶から補充を受ける。而して體驗と知覺とのうちに包含されたもの、或はこれより推論し得るものを步み越えたる或新しいものへの同じやうな變容は、また表象形像の諸聯關に於ても行はれる。諸形像に於いての或思惟が生ずるのである。この思惟

に於て、想像は或新しい自由に到達する。われらは過去を思惟によつて改造すべく試みる。われらは未來の諸種の可能性を豫見する。われらは自由なる出來事を案出し、このうちに思を潜める。われらは生なきものにわれらの感情を移入して、それを未曾有的なる生ある事象へと高める。こゝに支配する自己活動が意識的意圖を以て、合目的々に働くやうになると、これらすべては增强される。構成過程のこの系列を呼び起す諸々の力は、生によりて愉悅や憂苦や情調や激情や努力へと種々さまざまに動かさるゝ情意の奥底より生ずるのである。

このすべてのうちには、精神生活の最低い過程から上昇して、さう云ふ組織（詩的創作に適する組織。――譯者註）を有する人々を、詩的創作へと導き進める一つの偉大なる傾動が存する。このものは、最高の强度を以て、小兒のうちに、自然人のうちに、熱情と夢想とを有する人のうちに、藝術家のうちに働くのである。さればこのものは政治家・發明家・研究者たちの有する統制せられたる想像とは異なるものである。想像の絶えざる自己統

制は、構成の諸過程を現實の尺度に固結するものである。

二

さて詩的創造へと導く想像のこの特質から、如何にして詩的想像そのものが生ずるのであるか？ そして詩的想像の區別的特徵は何であるか？ 想像は――われらはかく見たのであるが、――心的關聯全部のうちに編み込まれて居る。日常生活に起るいづれの報告も、體驗せられたものを知らず識らずに改造する。願望や、恐怖や、將來の夢想は、現實的なるものを踰み越える。各々の行爲は未だ存在しない或ものの形像によつて規定される。生の理想は人間の前に立つて――否、人類の前に立つて歩み、人類をより高い諸目標へと導いて行く。生存の大なる契機たる誕生と愛と死とは、諸々の現實を覆飾し、現實以上のものを指示する色々の慣習（例へば冠婚葬祭の如き種々の慣習を指す。――譯者註）によつ

て聖化される。

さて私はまづ第一にこの種の想像と、われらの行爲の世界とは異つた第二の世界を築きあげる想像活動とを區別する。想像力は知らず識らずの裡に夢の形成するもののうちにあらはれる。夢こそは一切の詩人中最古のものである。次に想像力は、人間が現實による拘束から、自己を解放せんと努力する場合、生そのもののうちに、かゝる第二の世界を恣意的に肇造する。例へば遊戯に於てであるが、然しとりわけ、假裝茶番・變裝・祝祭行列などに於て、人生の祝祭的增强が、日常生活から區分されたる世界を生み出す場合にさうである。(中世の)騎士時代とまたルネサンスの宮廷文化とは生から全然解き離して、或詩的世界を創造する事が、生そのものうちに既に準備されてゐる事を示すものである。また同樣に經驗されたる現實と區別されたる世界は、宗教的想像の形成するもののうちにも築き上げられる。こゝでは目に見えざる諸力との交通に於て神性そのものに對する直觀が生ずる。これらの直觀は、生のうちに、又生

の惱みと活動とのうちに織り込まれて居る。さればこの宗教的想像力は、まづ第一に神話と神々への信仰とに於て、生の要求に結びつけられて居る。文化の進み行くうちに宗教的想像力は、漸次に宗教的な目的關係から離れて、今や夫の第二の世界を、一個の獨立せる重要性へと高めるのである。それはホメールや希臘の悲劇家たちや、ダンテやゲォルファム・フォン・エシェンバハが示せる通りである。されば詩(ポエズィー)が初めて、超感覺的なる宗教世界を、われらの生の要求と目的關係とのうちに含まれたる拘束より、全然的に切り離すのである。

今や初めてわれらは詩的想像の本性を把捉する。これまで述べられたすべての事柄は、この詩的想像の一般的條件を包含するに過ぎない。詩的想像は詩的世界が構築せらるる精神過程の眞髓である。この精神過程の根底は、いつも體驗であり、また體驗によりて作られたる把握の素地である。生の諸關係が詩人に於ける知覺の構成に既に影響する如く、これらの諸關係は詩的想像を支配し、またそのうちに現はれる。こゝ

では非任意的な・認め難い諸過程が、到るところで働いて居る。これらの諸過程は、詩人の生活する世界の色彩と形態とに絶えず工作を加へる。これこそ詩人に於ける體驗と想像との關聯が、われらに向つて開示され初める點である。或事件から、詩人の腦裡に或作の構想が未だ浮ばぬうちに、また詩人がその作の第一行目を未だ書き下さぬうちに、詩的世界は最早存在して居る。上述の心的經過によつて、詩的世界が成立し、また個々の作品が生ずる過程は、生の現實に對する一つの態度から、これの法則を受け取るもので、この態度は認識の聯關に對する經驗的諸要素の關係とは全く異なる。詩人は、自己のうちに見出し、また自己の外に認むる人間世界の諸經驗の豐富のうちに生きてゐる。そしてこれらの（內外に見る）事實は詩人にとつては、彼自らの諸要求の體系を滿足さするがために利用する（實用的の）與料でもなければ、またそのものから出發していくつかの普遍化を作り出す（學術的）材料でもない。——詩人の眼は沈思しつつ落着いてこれらの事實の上に憩らふ。これらの事實は詩人にとつては、意味深いの

である。詩人の感情はこれらの事實によつて、或は輕く、或は强く動かされる。これらの事實が、いかに彼自身の利害に遠からうとも、又これがいかに以前に生じたものであらうとも同じである。卽ちそれら（の事實）は彼自身の一部なのである。

全人間のすべての力が、模樣づきの敍述詩の色さまざまな絨氈を織りなす。情緒はあらゆる詩の生命の基底である。しかし詩は同時に思想によりて浸徹されて居る。と云ふのは、發達したる人間にありては、普遍的諸要素を自らのうちに包有せざる表象は只僅かしかなく、人間界にあつては、普遍的な社會關係と心理的な作用方法との働らきによりて、個性であると同時に、いろいろな視點の下で、何ものかを代表せざる個人は存在しないし、人生の迂餘曲折の或より普遍的な類型の個的實例ならざる運命も存しないからである。人と運命とのこれらの姿は、思索的考察の影響を受けて、これらが只一個の事實を現はして居るにしても、普遍的なものによつて全く飽和せられ、かくして普遍的なるものを代表するやうに形づくられるのである。このためには、詩

的作品のうちに挿入されたる普遍的な考察は、全く不要である。かゝる考察は、把握者を思索的なる氣分へと高めるが故に、その作用は主として、彼等を情緒や緊張や、心を拉して行く共感の束縛から、一時的に解放するようになるのである。最後にまた、一切の詩(ポエジイ)は自らの生れ出でたる意志の印銘を示して居る。既にシラーは、美のうちに到るところで道德的なるものの反映を求めて居る。ゲエテは云つた、「著作者の個人的性格が、公衆間に自己の意義を生み出すのであつて、彼の才幹がさうするのではない」と。藝術作品を生み出すに當つて働いた意志の形式は、動作(ハンドルング)の導き方にあらはれる。

想像が、その作つた人物達に對する關係は、或限界内に於ては、想像が眞の人間に對する關係に類似して居る。さればディケンズは、その人物たちと共に生活すること、人間と一緒に生活するのと同じであつた。それらの人物が大詰(カタストロー)(破局(フエ))に近づく時には、彼は彼等と一緒に惱んだ。そして彼等の沒落の瞬間を恐れたのであつた。バルザクは彼の『人間喜劇』(小說の名)の人物らに就て、それ等が恰も生けるかのやうに談つた。彼は彼等が、恰も彼と同じ上流社會に屬するが如くに、彼等を分析し・非難し・稱讃した。彼は彼等が置かれたる境遇に於て、何をしたらば最も良いだらうかと云ふ事に就て、長い議論をすることが出來た。ゲエテが詩作の過程中に於て、いかに悲劇的激情によつて動かされたるかを、われらはシラーに與へた彼の言葉から推測することが出來る。「自分は本當の悲劇を書くことが出來るかどうか、解らない。然し自分はその企に對してすら恐怖する。そして自分は單なるその試みだけでも、自己を破却するかも知れないと、ほとんど確信して居る」と。

されば詩人は世人が承認したがつて居るよりも、もつとずつと高い程度で、人間のあらゆる階級から離れて居る。そしてわれらは詩的手工品を作る愚直なる平凡人に基礎を置ける俗物的な見解に反對して、かゝる超凡(デモーニシュ)的な人々の內的動因と、外面に向つて歩み出づる行爲の方法とを、通常人の平均尺度よりではなくて、これらの人物の

組織より理解する習慣をつけねばならぬ。この強烈な・全く非任意的なる構築的衝動から、ゲエテの生活と創作とがまた理解されねばならぬ。

ゲエテの詩的想像

ゲエテの想像は、根元的過程から内面的の迫力を以て、詩的諸形像があらはれ來る上述の關聯に對する模範的な例證である。青年ゲエテの對話に於ても、詩作に於ても、すべてが生の極めて強烈なる感情によつて浸徹されて居る。いづれの狀態も一面的なる活力を以て云ひあらはされる。表徴に於けるやうに、各の狀態を具象化する種々の形像があらはれて來る。ゲエテが當時語り、或は書いたすべてのものは、成長して行く詩作の、外部に出ようとあせれる萠芽によつて滿されて居る。

種々の狀態を云ひあらはすべき此力から、言語の範圍に於ける彼の類ひなき想像的天賦が生ずるのである。言語は詩人の材料である。然しながらまた材料より以上のも

のである。詩の律動や、韻律や、言語の旋律に於ける感覺的の美は、言語が意味するものとは分離し得べき最高の效果を持てる一個獨特な領域を作るものである。例へば、ゲエテの詩『月に（寄す）』(An den Mond)を獨りで口吟むとき、何人が言葉の意味を全く意識に齎らすであらうか！　言葉の意味は、たゞ輕やかにそして祕密に充ちて、共に諧音を發するに過ぎない。畫家が自らの線と色との諸效果に便る如く、詩人が言葉の效果を手がかりとして、注意の力强い凝定を以て造形し形成する事のうちに、詩人の言語想像の基礎は存するのである。ゲエテは言語のこの領域内に於て、王者的に支配した。そしてこの事はまさしく、體驗が彼のうちに於て、到るところで又直接に、表現への衝動と結びついて居た事より生じたのである。彼の對話が、彼の青年期に於て、散文から彼の詩句の引用へと移つて行つた事は稀ではなかつた。そのさすらひの途すがら、彼は自らの內面運動のリズムが、聲調となつてそこに表はれたる『奇妙なる讃歌と酒神の歌』などを、思ふに當時獨りで口吟んだであらう。さればゲエテには、偉大にして自由な律動的構築の藝術が、その自然的な經過とその潑溂さとを以て內面からやつて來た。生を支配する威力へのかやうな意志が、かくの如き律動を以て云ひあらはされた事は未だ嘗てなかつた。彼はその青年時代に、これまで傳承された言語の全部を破却した。彼はクロプシュトクを基礎として一つ新詩體を創造した。彼はその際彼の故郷の方言を顧眄して採り用ひた。彼は諸々の動詞の生氣ある活力を利用した。彼は未曾有の造語術によつて效果を得た。この造語術に於て、彼は動詞を新たに前綴と結びつけた。彼は名詞を不變化詞と一緒にしたり、動詞をそれの補足語と複合させた。或は彼は不變化詞を取り去る事によつて、動詞の感覺的活力を强めたりした。彼はいくつもの名詞を新しい大きな語詞複合體に組み立てた。彼は意味深い言葉の繰り返しによつて表現の力を高めた。彼は內面の動きを模倣せんが爲に、問や答や叫びなどをすべて巡り用ひた。各の內的狀態は言語の或獨特な旋律のうちに現はされた。その後彼はヴァイマール滯在の最初の年代に、故郷の方言の利用を漸次的に減少した。

彼は激烈なる表現を和らげ、心的激動の描寫に完全さを與へ、意味深い形容詞を增加して使用する如き新手段によつて、對象となるものを落ち着いた靜觀性へと高めたのである。かくて偉つては、ルテルがその聖書飜譯によつて獨逸の文語を基礎づけたるその土臺の上に、（ゲエテが）シラアと共働する事によつて獨逸の文語の古典的完成は生じたのである。彼の偉大なる文體が、今やこの基礎の上に築き上げられるのである。かゝる作業のうちに、ゲエテの無比の言語想像があらはれて居る。この想像の威力は、後に來る獨逸の全詩作が、これによつて全く支配され、彼の詩的用語は今日でもなほ讀者の心理に、あらゆる情調を生み出し得る程に廣大無邊なのである。

體驗を表現しようとする衝動と天賦とから開展したゲエテのこの言語想像は、今や事物の可視的な外觀の範圍に於ける驚嘆すべき想像力と結合して居る。感動せる心的狀態の上に、かくして物象世界の形像美が擴がるのである。

視覺の領域のなかで形造するかゝる天賦の自然的基礎を、（ゲエテの）『形態學論考』中の次の如き個所が明瞭に示して居る。『私はこんなやうな天賦を持つて居た。私が眼を閉ざし、頭を垂れて、視覺器官の中央に一つの草花を想像すると、此花は一瞬間といへども、最初の姿のまゝでは止まつて居ないで、ばらばらに分れ散る。そしてその內部から、またもや有色の――また恐らく綠色の――花瓣から成れる・いくつかの新しい草花が發育する。これらは決して自然の草花ではなくて、空想的のものではあるが、然しそれは彫刻家の作る薔薇花狀の裝飾の如く、規則正しいものであつた。萠え上る創造の働きを固定すべきよすがもなかつた。之に反してこの働きは、私の好む間ぢう繼續してあらはれ、衰弱することも、增强することもなかつた。私が多彩硝子圓盤の裝飾物（硝子圓盤卽裝飾物で別物ではない。―譯者註）を想見する度每に、いつも同一事象を生ずることが出來た。それは同時に中心から圓周に向つて絕えず變化しつゝけること、全くわれらの時代に初めて發明された萬華鏡の如きものであつた。」私自身が實驗した通りに、觀察者が眠に陷る前に、良好なる諸條件のもとにて、登り來る有色の霧が、暗い視界のなかで、自

ら形づくつて形姿となり、また自らを變化させるのを見る事に成功するならば、われらはゲエテに於て、自然に造形して行く想像力のこれらの創造物が持てる・この上なき輕快さと美しさとを認め得るのである。ゲエテはこの天賦が、變更せる形にて、彼の小說『親和力』のなかで、――この作は、心情生活の最高の現はれに於てすらも、われらは生理的諸條件に支配されて居るものだといふ事の說明に全く浸徹されて居る、――ゲエテ自身の好愛するオティーリエの人物に移し置いたのであつた。この敍述は、夫のカルダーヌス（Hieronymus Cardanus 1501―1576 伊太利文藝復興期の自然研究者、醫學數學等を敎へた。――譯者註）が、自分自身に就て談つた事柄を、こゝで思ひ出させる。オティーリエは、睡眠と覺醒との間の狀態で、軟かな光に照されたる一間を眺める、そして出征して今こゝには不在なるエドゥアルト（『親和力』中の一人物の名。――譯者註）を、そのなかに認める。想像の作れるものが、詩人その人の上に及ぼす强い力は、戲曲『タソー』のあまたの個所で、深い智識を以て云ひ現はされてゐる。例へば『私は私の胸のうちに夜となく晝となく變化するこの衝動をとゞめようとしても無駄である』など。それからタソーがレオノーレ（『タソー』中の人物、公主の名。――譯者註）に、追放されたもの（自己を指す。――譯者註）がナポリへと赴くであらう將來の途上を描いて「變裝して私は行きます。巡禮か羊牧ひかの見窄らしい上衣を私は着けます」など云ふが如きがそれである。――この想像心像は氣味惡い魔力を以て彼を取り圍むのであるが、この魔力を解く爲でもあるかのやうに、タソーの談話を、中途で遮りとゞめるレオノーレの戰慄を、われらは共に分つのである。そして『バンドーラ』（ゲエテ作のアレゴリー風の祝祭曲。――譯者註）に於て、ゲエテはこれらすべてのものの最多面的にして最强烈なる詩的描寫を與へて居る。

ゲエテは、かゝる諸經驗より彼の得たる詩人の天性への洞觀を、また次の如く普遍化した。「詩人とか、すべての本來的の藝術家とかは、生れつきでなければならぬと云ふ言葉の意味を、人々はより明瞭に理解するであらう。と云ふのは、內面的生產力が、夫の殘像を――卽ち器官の裡に、記憶の裡に、或は想像力の裡に殘留せる諸像を、故

意でなく、また意慾することなくして、潑溂と現はれ出でしめなければならないからである。攸忽として過ぎ行く影像から、眞に現前的な形像が造り出される爲にそれらのもの（殘像）は開展し、擴大し、收縮しなければならぬ。」彼はまた官房長ミュラーに語つて云ふ。「私の感官的把捉能力に關して云ふと、私は不思議な質（たち）に出來て居て、一切の輪廓や一切の形態を、極めて鋭く記憶裡に保存しますが、この際種々な畸形や缺陥によつて、極めて活潑に私自身が作用されることを見出します。」「あの鋭い把捉能力と印象能力とが無かつたら、私はまた私の人物たちをあんなに活潑にそして鋭く個性化して、生み出すことは出來なかつたでせう。把握のこの明瞭さと精確さとは、以前に多年の間、自分が圖案や作畫に對して、天賦と才幹とを持つてゐたといふ妄想へ、私を誤導したのでした。」

同じ意味でゲエテは彼の『箴言』に於て、詩の目的をかう解して居る。「詩人は描寫のみがたよりである。描寫の最上のものは、それが現實と（眞實味を）競爭する場合である。換言すれば、描寫の敍述が何人にも、現前のものと思はれ得る位に、精神によりて生々（いきいき）として居る場合である。」

さてこの兩種の詩的想像が、最高の强さを以て、ゲエテのうちに共働することによつて、近代に類ひのない詩的天賦の普遍的性質が生ずるのである。彼はフランクフルト時代の末期の敍述に於て、彼の天賦の力と特性とを自ら記述した。「私の創作的才能は、數年以來一瞬時といへども、私を放置しなかつた。私が日中覺醒して居て認めたことは、あまつさへ折々夜中に本式の夢となつて現はれた。そして私が眼を開くと、奇妙なる新しい全體が、或は既に存在せるものの部分が、私の眼前にあらはれた。」孤獨の場合に於ても、集（つど）ひのたゞ中に於ても、この天賦は彼の裡に活動した。當時彼は、詩『プロメートイス』に於て、かゝる創造力の自主的意識を云ひあらはして居る。彼はこの天賦を「全く自然なものと見做さ」ざるを得なかつた。この天賦は「知らず識らずに、否意志に反してすら」出現した。これは折々長期の間休息した。そして彼は

いかに努めても、何物をも產み出すことが出來なかつた。かうして居ると、やがてま
た、ペンは彼の「夜遊病的詩作」の後に隨行することが出來なかつた（位詩想が奔騰
した）。やゝ大なる作すら、當時彼が長い間、これを心に懷いて持ち廻はり、色々と推
敲した後、靈感を受けたかのやうに（突如として）出來上つたのであつた。彼は『ヴェ
ールテル』を「可成り無意識的に」、また夢に導かるる如き有樣で、四週間のうちに書
いたが、全體の布局や、或何等かの部分の取扱を、前以て紙に書きつけて置くやうな
事はしなかつた。それでも出來上つてから、改竄すべき或ものを、彼は殆んど見出さ
なかつた。『ヘルマンとドロテーア』（一七九七）以前の最も完全なる・そして最も統一的な
藝術品（ヴェールテル）は、かくの如くにして出來上つたのである。このすべての事のうちに、
詩的想像の諸性質が極度の强さを以て、われらに現はれて來る。それは卽ち、精神的
の諸々の力の充實から出て來れる・非任意的に合法的な・そして通常生活とそれの目
的とより離脫せる創作行爲である。彼の青年期の詩作のこの特性は、晩年まで維持さ

れた。たゞ沈着と愼重と減退し行く想像力とによつて變化を受けただけである。長い
準備期のあとには、極めて熱烈なる創作活動の時代が續いた。「漸次に運び集められ・
積み重ねられたる薪の堆積は、とうとう燃え始めた」と、ゲエテは千七百九十五年小
說『ヴィルヘルム・マイステル』の制作に從事しつゝ、かう報告して居る。彼は自己
の周圍に寂寥をつくつた。殊に好んでイェーナの館でさうしたのである。これは詩的
情調と創作の內的關聯とを確保せんが爲であつた。一切の意慾は、この際幸運なる成
功を捗らせるものではなかつた。最良のものは、いつも自發的に彼のもとに來るので
あつた。かくして彼の創作は長い時期に亘つて展開して行つた。「或種の大なる動因（モティーフ）
や、聖徒物語、太古史的傳說などは、私の心に甚だ深く印象した。その爲私はそれら
を四十乃至五十年間生々（いき）とまた活動的に私のうちに保有して居た。かゝる貴重なる形
像が、私の想像力のなかで、屢々改新されるのを見るべく、私にはそれが最美しい財
產であるやうに思はれた。何故なれば、これらのものは成程常に形姿を變へてゐるの

ではあるが、全く自らを變ずるのではなくて、より純粋なる形、よりはつきりした描寫に向つて、成熟して行つたからである。」他の詩人たちに於ては、――例へばシラーにあつては、――各の敍述作品の成立は、力を加へたるそして意識されたる勞作であつた。恐らく意志のこの推進的な威力が、また動作(ハンドルンゲ)にも傳はつて、われらがシラーの戯曲に於て嘆賞するやうな力强い動きを之に與へたものであらう。然しゲエテの最上の敍述すらも、かゝる性質を示しては居ないのである。更にまたゲエテは、勞作しつゝある間に、初められたる自作に關する友人たちの批判より、必ずしも全的に獨立しては居なかつた。特にシラーから『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』の續筆に關して、斷乎たる影響を受けたのである。又他の場合には、いくつかの批判が、或作品の計畫を中止するように、彼の心を決定したのであつた。彼もまた他の偉大なる物語作家のやうに、彼の想像の形づくつたものを、單に心中に描き出すことのみによつて、深く感動せられ震撼されることがあり得た。彼が『ヴィルヘルム・マイスター』の或場面の細部全體を心に思ひ浮べたときに、「彼は終に激しく泣き初めた」のである。『ヘルマンとドロテーア』の丁度書き終られた或部分を、朗讀して聞かせたときにも、同じ事柄が彼に起つた。「かうして自分の炭火で融けるのだ」と、眼をぬぐひながら彼は云つた。

然しこの想像の威力と特質とに就ての最完全なる見解は、この想像力がゲエテなる有機體(物人)のいづれの部分にも行き亘つて、それの活動を擴げて居たさまを窮めたとき、初めて生れ出でるのである。想像の影響は、ゲエテの生活、ゲエテの世界觀並に彼の理想に浸徹して居た。青年ゲエテにあつては、想像は夫の非常に豐富ながらも、なほ未だ統制されざる諸力のたゞ中に支配して居た。想像は醗酵しつゝある青春血氣の時代に於て、喜びと悲しみとを無限に高めた。想像はゲエテのために、すべての現實的なるものを、美の面紗のうちに包んだ。そして男性をも女性をも魅了し、且つ自らと共に之を拉し去る天賦を、ゲエテその人に與へたのである。然し想像は、現前的の

ものを彼に理想化して見せたかと思ふと、それはまたその後忽ち、各々の生活境遇に於て、人々を苦しめつゝ存在するものを、堪え難きものに擴大し、新しい形像によつて、彼を無限の遠距離へと引張つて行つた。かやうにして想像はまた彼のうちに存する青春と、天才的意識との不安と不滿とを高めて——遂には自殺を弄び、或は友情と愛と勤勞と生の目的とに於ける各の不安定な狀態に至らしめ、『原ファウスト』に云ひ表はされてゐる通りに、超人主義の鬼魔的なるものへまで赴かせたのであつた。彼は當時、いかなる場合でも、任意に行動する事をほとんど許されざる憑かれたる者（魔的のものに憑かれた人、亂心者。——譯者註）の如くに、ヤーコビ（Friedrich Heinrich Jocobi 1743—1819 哲學者、小說作者。——譯者註）には思はれた。想像はこの人生を假象の世界に高めることによつて、彼の生活の不安定よりの一時的解放を、いくたびも詩作に於て彼に與へた。彼は自らを動かしたものを云ひ現はす事で、精神を輕くしたのであつた。彼は自分自身の生活狀態を、自己には緣なきものとして、彼自身の外に置くことによつて、彼自らの生活狀態より離脫したのであつた。かく彼自身の外に置かれたるものは、詩的想像力の領土のうちにそれの場所を有し、この天地に於て、彼（ゲエテ）自身のうちに存する制約から獨立して、それ自らの論理關係に於て展開するのであつた。そしてこの想像こそは、彼が自己自身を克服して、彼の壯年期の成熟せる理想へと進んで行つた時にも、また大に彼を助けたのである。何となれば此理想は、生をその全體に於て、生のうちに含まれたる・出來得る限りの高い意味へと高める事に基礎を置いたからであつた。されば この理想の捕捉とその實現とは、抽象的道德的な諸規則の實現とは反對に、過去的なるもの、未來的なるもの及び可能的なるものの想像心像と結びつけられて居たのである。何となれば、これらの心像に於ける生は、自己自身の各の理想表象の基礎となつて居るからである。最後に云へば、詩的想像は、ゲエテその人に自然の祕密と藝術の祕密とを開いて見せたのである。自然に對するゲエテの無關心的な直觀が、藝術的創作に緣近いものであつた通りに、この直觀の對象卽ち自然は、彼自身の內部で創造的

に活動して居た想像力の體驗の裡に於て、自己の姿を彼に示したのであつた。自然は、彼には法則的・合目的々に働らく力だと思はれた。この力は變容と漸增とに於て、典型的なる形式の構築法と於て、及び全體の調和に於て現はれて居るのである。されば藝術は、彼にとつては、自然のかやうな作用の最高の現はれでなければならなかつたのである。

體驗と詩

生と想像と作品の形成との關係から、詩のすべての普遍的な諸性質は生ずる。いづれの詩的作品も、個々の事件を眼前に描出する。夫故に言語とそれの結合とによつて或現實的なるものの單なる假象が生ずるのである。されば詩的作品は、いづれも印象と幻想とを生ずる爲に、言語の一切の手段を用ひなければならぬ。言語のこの藝術的な取扱ひのうちに、詩的作品の第一の而して最重大なる美的價値が存するのである。詩的作品は生の表現たるべき、或は生の描寫であるべき意圖を持つて居ない。それは自らの對象を、實際の生の關聯から孤立させて、これにそれ自らに於ける綜體性(トタリテート)を與ふるものである。されば詩的作品は、讀者がこの假象の世界に於て、自己の事實的生

活の必然性の外部に自らを發見することによつて、讀者を自由の裡に移し入れるのである。詩的作品はまた讀者の生活感情を高める。自らの生の經路によつて局限された人間に對して、詩的作品は彼その人が實現し得ざる生の諸々の可能性を、充分に經驗して見たいといふ憧憬を滿足させるものである。これはまた、より高い・より力强い世界への一瞥を、彼に開いて見せるのである。詩的作品はまた追體驗によつて、精神の諸過程の彼に適合せる經過のうちに、彼の全性質を働らかしめる。それは音響や律動や官能的直觀性に對する喜悅から初めて、(終には)事件を生の內面に對するそれの關係から見て、これを最も深く理解せしむるに至るのである。何となれば、いづれの眞の詩的作品も、それが描寫する現實の斷面に於て、かう云ふ風には、以前には見られたことのなかつた生の一性質を顯揚するからである。それは諸々の事件の、或は諸々の行爲の因果的連鎖を示すことによつて、また同時に、生の關聯に於て或出來事とその個々の部分とに附隨する諸價値を追體驗せしむる。かくして出來事は、それの

深遠なる意義へと高められる。されば偉大なる自然派文學は、いかにそれが無慰籍的であり、奇怪であつて、盲目的な自然に隷屬して居ようとも、生のかやうな深遠な意義を有する殊相を描き出さないものはないのである。そこでまた生の聯關そのものと生の意味とが、取扱はれたる出來事から現はれ出でるやうに、この出來事を提出するのが、最大の詩人たちの技巧である。詩(ポエヂイー)は生の理解をわれらに啓き示すものである。(かくて)われらは大詩人の眼を以て、人事の價値と關聯とを諦視する。

されば個人的體驗や、他人の境遇の理解や、經驗を理念によつて擴大し深化する事などが、詩的創作の基底に含まれて居る。詩的創作の出發點はいつも個人的體驗としての、或は現代並に過去の他人の理解としての、及びそれらの人々の共働せる事件そのものの理解としての生の經驗である。詩人が閱歷して行く無數の生の狀態のいづれもが、心理學的の意味で、體驗だと目され得る。詩人のいろいろの瞬間のなかで、彼に生の一殊相を、聞き示す瞬間だけが、彼の詩作に對して、より根深き關係を持ち得

るのである。そして理念の世界から、如何なるものが詩人の心中に流れ込まうとも、——成程理念が、ダンテやシェークスピアやシラーに及ぼした影響は甚大ではある、——すべての宗教的・形而上學的・歴史的の理念は、畢竟過去の偉大なる經驗からの標本であり、それらのものの代表に過ぎない。そして詩人自身の經驗が、これらを詩人に理解させる限りに於てのみ、それらは生に於ける新しきものを認むべく彼に役立つのである。シラーがカントから受け取つた自由の理想主義は、實はシラーの高貴な天性が、世界との葛藤に於て、自らの威嚴と主權とを確保するに至れる偉大なる內的經驗を、シラーその人に解明したに過ぎなかつたのである。

詩的體驗の變更のいかなる多樣性が、ここから現はれて來なければならないであらうか！　希臘の悲劇作家たちは、內的宗教的の世界を、戯曲的に視得べきものに移し出したことによつて、極めて深い體驗の表現は生れたのであるが、この表現は然し同時に、强力なる外面的事實の描寫であつた。そして比ひ稀れなる效果が、この表現から生じたに違ひない。われらはこの效果の或ものを、今なほオーベルアメルガウ（獨逸國バイエルンに在る市の名、この地の基督受難劇は世界的に有名である。——譯者註）の演劇や獨逸の宗教樂で經驗する。シェークスピアは外部から與へられたる或事件を理解しつゝ、これに全く身を委ねる。彼は自己自身の生をその裡に置く。かくして自然が提供する通りに多趣多樣であり、また體驗が屆く限りの深さを持てる彼の人物らが生ずるのである。ゲエテは個人的體驗を、——自己自身に於ける造形的工事を、表現する體驗とその表現との關係に於て、精神生活中、いつも觀察に向つては隱匿されて居たもの、及びその全經路並にその全體の深さがあらはれて來る。こゝでは到るところで個人的體驗と表現との間の關係が、外部的所與のものと理解との間の關係と、さまざまなる混合でもつて互に織りまぜられてゐる。何となれば個人的體驗に於ては、或心的狀態が與へられて居るけれど、同時にまたこの心的狀態に關係して、周圍の世界の對象性（具象性）が與へられてゐるのである。また理解と模作とに於て、他人の精神生活は捕捉されるけれど、しかしそれはたゞ、その中

に移入せられたる自己の精神生活によつて把捉されるに過ぎない。これらの諸要素の強度と結合とだけが、詩的經驗の種々なる變化に於て、いつも異つて來るのである。われら自身に就て、世界に就て、人性の最後に到達し得べき奥底に就て、及び個性の饒多なることに就て、われらに教ゆる詩人の透視的天賦は、これらの基礎の上で展開する。そしてこの透視的天賦の無數の形式が生ずるのである。

この基底の上で、或出來事が深遠なる意義に高められる事によつて、或詩的作品は生ずるのである。さてわれらが或自然物體に於て、その化學的組成と、その重量と、その溫度の狀態とを區別して、それぞれに研究する如く、われらは敍述的作品、卽ち敍情詩、ロマンツェ（一種の物語詩の名稱。――譯者註）、バラーデ（同上）、戲曲或は小說に於て、材料、詩的情調、動因（モティーフ）、結構、人物及び描寫法などを互に分けて考へる。これら諸概念のうち、最重要なのは、動因の概念である。何となれば動因のうちに、詩人の經驗せるものがその深遠な意義に於て把握されて居るのである。卽ち詩人の經驗せるものが、動因のうちに於て、結構・人物・詩的形式等と關聯する。動因は作の形態を決定する造形力を、自らのうちに包有する。有機的發育に於ける如くに、生の經驗の中から、詩作に於て區別され得るこれらの個々の要素が發達する。そしてこれらの要素の各は、作の關聯の上で、或一つの仕事を成し遂げる。されば詩作はいづれも、特殊種類の生ける創造物である。或詩人に對する最高の理解は、體驗・理解・經驗などの改變（この改變が彼の創作を決定する）を生ぜしむる彼の內外の諸條件の總括概念が呈示され、またこの改變から出發して、動因や結構や人物や描寫手段などを形づくる關聯が包括され得る時、初めて達せられるであらう。

さて私は、ゲエテに於ける生と生の經驗と想像と詩的作品との間に存する關係を云ひあらはすべく努めるのであるが、この場合またもや、この存在に於ける驚くべき統一と調和とが、まづ第一に私の心を捉へるのである。彼のうちには謎も不調和もほとんどない。この生活は或內面的法則に從つての生長であるが、この法則はいかばかり

簡單であり、またいかばかり規則的に且つ不斷に作用するであらうか！　自然の造形する力の直觀から、ゲーテは之に倣つて、詩作の對象たる人生をつくり、そしてこゝに發見せられたる內面的合法性によつて、彼は自らの詩的世界を形づくり、また彼自身を形成したのであつた、――しかもこの兩者を不可分離の關聯に於てである。

この異常なる現象を作り出す條件は、獨逸精神史のうちに存在して居たのである。ルテルやライプニッ以來、この國の精神史は、宗教・科學・詩作の內面的調和――これは精神のそれ自身への沈潛と、この深所より生ずる精神の形造とに基づくのであるが――の建成に從事しつゝあつた。かくして世界史的の力は生れた。この力の統一的な作用は十八世紀以來、獨逸國から歐羅巴に擴がつて行つたのである。この力は實にゲエテの時代の一切の創作物を充した。われらの生存の無意識的な深所から、普遍的・人間的なるものを取り上げて來ることに於て、ゲエテはカント、フィヒテ及ヘーゲルの先驗哲學や、ベートホーフェンの器樂と結びついて居り、人間をその本質の內面法則から形成するといふ理想に於ては、これらの哲人たちや、シラー、フムボルト、シュライエルマヘルらと同一であつた。この新文化の土臺の上に、ゲエテ、シラー、ジャン・パウル (Jean Paul [Friedrich Richter] 1763―1825) などが創造して、ノヴァーリス、ヘルデルリーン以來引續いて築かれたる詩的世界が成立したのであつた。

歐洲の精神的發達の全體はかくして新しい世界史的な力の影響の下に置かれた。この立場よりして、ゲエテは生を生そのものから理解し、生をその深遠な意味と美とに於て描寫すべき最高の詩的課題を解決したのである。詩人的天賦は彼にあつては單に、彼の生そのもののうちに既に活動せる・創造して行く力の最高示現に過ぎなかつた。生と形造と詩作と――この三つは彼にあつては、科學的研究のうちにその根底を有する一つの新しい關聯となるのである。この關聯から、眞實と純粹なる自然さと純正なる視と、われらの生存の囚はれざる解釋とが生ずるのであるが、これらのものは、彼に從續する一切の思索家・詩人並に著述家たちの規範となつた。

私はこの詩（ポエヂイー）の本質を、類似と對照とによつて明白ならしめんが爲に、（他のものとの）比較の方法を選び取る。シェークスピアとゲエテとは、今日のわれらにとりては、近代世界文學の二つの最高の力として相並んで現はれる。そしてわれらの見るところに依ると、彼等こそは、詩的經驗の、從つて人間描寫の意味深い諸改變を代表するものであり、生の測りがたき面貌を、最深刻に眺めたるこの二人の偉大なる日耳曼の洞視者は、互に相補充し合ふ。そしてこれに近緣的なる人々が彼等の傍に立つのである。

シェークスピア

(William Shakespeare)

ディケンズのいくつかの書翰と彼の傳記とは、われらにこの詩人の工房裡への一瞥を許す。彼は全生涯を、實際上の經驗を以て、また常に新しい經驗範圍が彼に提供するものゝ最も精密なるそして非故意的なる觀察を以て過す一人の天才者であるやうに見える。彼は徒弟として、辯護士の書記として、國會や地方の通信員として、多くの業務と生活境遇とを、急ぎ通過し、多くの事實を、彼の觀察の下に置き得る位置にあり、また歐洲の大抵の國々の牢獄と精神病院と並に諸國の上流社會とを甚だ根本的に研究したので、獨逸に於ては、詩人たるもののいかなる生涯も、これとは比較し得られないのである。これと結びついて居るのは、その猛烈なる氣象と、狂熱的に活動する

天性の途方もない過失、自己の個性の各のより高い完成に對する冷淡、又各のより高い知的な仕事に對する無關心な態度などである。これらすべては、この經驗材料より形づくられたるもろもろの人物と共に生きる事に於ける至福と惱とに充ちたる或生活（卽ちディケンズの生活）の外側である。彼は自己以外に於て見たところのものに全く捧げられてゐるのである。

われらはスチュアルト・ミル（John Stuart Mill 1806—1873）と時代を共にすることの詩人（卽ちディケンズ 1812—1870）の詩的創作を、かやうに精密なる諸報告より研究すると、この認識からして、またベーコン卿（Lord Bacon 1561—1626）の同時代者たるシェークスピアに於ける・われらには一見して全く理解し難い內的生活と形成との上に、（說明の）或光が落ちて來るのである。

シェークスピアは或透視し難き闇黑に包まれて居るやうに見える。極めて熱心なる蒐集も、たゞ敎會の記錄及法律事務に關する文書の若干と、同時代の著述家たちの二三の論難的な個所とを、眞に信憑すべき材料として獲得したに過ぎなかつた。彼の人物は、時人の注目を高い程度では引かなかつたやうに見える。彼の戲曲は、たゞ大なる用意を以てしてのみ、彼の思惟方法や彼の宗敎的或は哲學的確信及彼の性格に對する結論に利用され得る。彼の十四行詩（ソネテ）は、それ自ら一個の祕密である。何となれば、われらはそれらのものうちに存する感情方法の非常に奇論的なことのために、これらを言葉通りに採ることを敢えてしないし、さればとて、これらの詩のうちに存する極めて主觀的にして、最個性的な感じ方の核子を、採り上げることも、たじろぎつゝ斷念し得ないからである。

われらは、彼自身の心的組織に就ての二三の疑ひなき・そして彼の作品そのものの うちに與へられる事實から出發する。シェークスピアは適切なる根本的且つ全然積極的な知覺心像の一範域を示すもので、この心像は他のいかなる詩人の精確なる心像の總和とも、ほんの一寸すら比較出來ぬ程に豐富なものである。シェークスピアにあつ

ては、知覺と記憶との或精力（エネルギー）が承認されねばならぬ。そしてゲエテやディケンズが自分自身について物語る事すら、この精力の遙かに、遙かに後ろに立つのである。既に事物に對する符牒すらも、彼は王者の如くに之を驅使するのである。マクス・ミュラー（Max Müller 1853—1900 英吉利の言語學者、宗教學者。——譯者註）の計算したところに依ると、約一萬五千語が、——即ちミルトンの用語のほゞ二倍が、シェークスピアの使用に任かせられて居たと（殆んど同時代に出版された舊約聖書は約五千六百餘語しか使つてゐないと云はれる。——譯者註）。動植物に關する彼の智識は、驚くべき程精確且廣汎なものだとして、專門家たちによりて證明された。彼は鷹や鷹狩に就て、その一生を獵師として暮した人の如くに物語るので、斯道の識者の專門的研究が、これらに關する個所の二三を漸く解らせた位であつた。彼はまたヴォルター・スコトの如くいつも二三の愛犬を脚下に横はらせて居たかのやうに、犬について談るのである。醫師たちがなほ未だ狂人に關して、全く迷信的思想に滿されて居た時代に於て、彼は病的精神狀態の深刻なる觀察者であつたやうに思はれるので、現代の卓越せ

る精神病醫たちは、人々が自然の事實そのものを研究する如くに、沙翁（シェークスピア）のつくつた人々を研究したほどである。また彼の法律事件及法律事務に關する智識は、卓越せる英吉利の法律家たちが、沙翁は或辯護士の門下として專門的に修業する機會を持つたといふ假定によりてのみ、この專門智識を說明し得た程に深かつた。そして彼の性格描寫の範域と深さとは、われらに對して詩的能力の最廣大なる限界を示すものである。

かやうな結果は、原因として單に知覺と記憶との最高の精力を前提とする計りではない。われらはこの事を成就する天才を、全く事實に身を捧げたものとして、——見出しつゝ、觀察しつゝ、彼の自我を全く忘却しつゝ、且つこの自我が捕捉するものに、自己を變じつゝ、全然事實に身を捧げたものとして——想像せざるを得ないのである。私はこゝに自づと史家ランケの言葉に想到しないわけには行かない。「私は私自身といふものを拭ひ去りたい、そして事物をそれがあるがまゝに見たい」と。彼（沙翁）は自分自身のうちに於てではなく、彼の外部にあつて彼の上に働きかけたもののうちに

シェークスピア

生きたのであつた。彼は全く偉大なる精神的の眼であつた。彼は自らのうちに強力なる確信の一關聯を作り出さうとか、嚴めしい威力を有する自己を作らうとか云ふ要求は、少しも持つて居なかつた。彼はラファエルの如く溫柔なる優雅さを有する人物として記述される。そして同時に彼には、あらゆる人間の天性と激情とを、それの最極の結果と、極めて祕密なる隱れ場所とへまで追究して行く力が與へられて居た。この事と一致するのは、彼の人物描寫法であつて、この描寫法は、觀察者が人生に於て、人間を外部より眺める通りに、その肉體的輪廓の充分なる明瞭さと意志の動きとに於て、人間を描出するのであるが、此等の人間の最終動機は往々にして測り知りがたい。

この見方に、彼の生活に就ての報告が一致する。彼の作中の主人公たちの迅速にして・殆んど熱病に罹れる如き脈膊は、マーロ(Christopher Marlowe 沙翁と同時代の人、二十九歳にて橫死す、戯曲家としては彼の先輩である。—譯者註)や、ベン・ジョンソン(Ben Jonson 1572—1637 劇作者兼學者、沙翁の友人、彼が沙翁を評して、

憎むらくは古典の智識にあまりに乏しいと云つたと云ふ話は有名である。—譯者註)に於ける如く、また彼の內部にも波打つてゐる。十八歳で彼は結婚した。そしてその翌年には一家に對する配慮を負はされたのである。(彼は千五百六十四年に生れ、千五百八十二年に結婚した。彼の娘シュザヌは千五百八十三年五月二十六日、ハムネトとジェーディスは千五百八十五年に生れた(双生兒)のである)。千五百八十五年から千五百八十七年の間に、二十年代の初期の年齢を以て生計を立てんがために、彼は倫敦にあらはれた。千五百九十二年卽ち彼が二十八歳の時には、彼は旣に名聲と富とを獲得し、グリーン(Robert Greene 1558—1592 英吉利の劇作家、小說家。—譯者註)が、當時の或パムフレットに於て、彼を「絕對に萬能な人」として、また「彼の自負によれば、この國に於ける唯一の※舞臺操縱者」だとして擧げる程になつたのである。

〔註〕※原語は Shake-scene——この文字は沙翁傳には其屢引用されゐるが、Shakespeare に因めることは勿論であらうけれど、適確な註解に接しない。普通はマネージャー又は舞臺裝飾者の義たれど、その外シェークスピア

にもつと廣い暗示があるのかも知れない。――譯者註

かくして彼は千五百九十八年に認められ、爾來彼の名はその作に係る戯曲の扉に記されることとなつた。既にこの時彼は漸次に、ストラトフォード（彼の生れ故郷の名。――譯者註）に隱退のために萬事を準備し初めたのである。千六百二年、卽ち彼の三十八歳のときには、彼はなほ倫敦で働いては居たけれど、ストラトフォードに於ては、既に富裕なる田舍紳士であつた。彼の四十年代には（もつと精密な年月は、これまでに發見された文書からは推定されない）われらは彼がその鄕里に於て、庭園に圍まれたる堂々たる邸宅のうちに、その生涯の驀進的な怱忙さから、休らひつゝあるのを見出すのである。彼の生涯は終つた。千六百十九年四月二十三日、五十三歳にして彼はストラトフォードで物故した。それは彼の末娘の結婚式の直後であつた。

人間の生涯を決定すると稱せらるゝ習ひなる・結婚と職業といふ二つの點に於て、急速にして突進的な決定の行はれた後には、苦しい生の辛勞と幻滅とが追躡したかの

やうに思はれる。生の辛酸なる感じと、また生の斷乎として明瞭なる取扱方とが、彼の壯年時代を充して居る。またかう云ふと妙であるが、彼の生涯の行爲の關聯は、單に彼の詩（ポエヂイー）のうちにのみ存するのではなくて、彼自身及び彼の家族を裕福なる田舍紳士の社會に高めようとする意志のうちにも、同樣に存したのである。彼はディケンズの如くに、一個多辯な而して傍觀する見物人として、人生と人間とを知つたのではなく、極めて陽氣な喜劇に於ても、また悲劇に於ても、同じやうに彼自らが加はつて働いたのである。彼は全く無爲なるよりも、寧ろ或間違つた何事かをなすを好む悅力的性質を持つて居た。されば人生の智識に於ては、沙翁と比較され得る只一人の詩人なる夫の西班牙のセルヴァンテスも、或は法王使節の祕書として、或は種々なる征戰に於ける兵士として、又は奴隷の鎖につながれたる軍人として、さてはまた著述家として、その生涯を不安に滿ちて足早に通過した。そして現實と爭鬪せる・動搖したる青年期のくさぐさの經驗そのものが、かやうな詩人達に、その經驗範圍の主なる材料を

シェークスピア

贈つたのであつた。（古典希臘の）エーシュロスでも、ゾーフォクレスでも、市民としての、及び兵士としての活動的生活に於て、世界に對する彼等の理解を獲得したのである。そしてオイリーピデスに至つて初めて、文學者として、その書庫のうちに生活したのであつた。

いかにして彼の閲歴が、彼の戯曲の示す巨大なる世間的經驗を彼に齎らしたかと云ふ事は、今になほ跡づけられ得るのである。彼が生長したるストラトフォードあたりの風景が――なだらかなる丘陵と飽和されたる草原の綠色とその間をエヴォンの流れがうねり行く村々を埋めて居る叢林と果樹園とを具へたるストラトフォードあたりの風景が――いかに屢々彼の詩のうちに繰り返へしてあらはれたらうか！　これぞまさしく『夏の夜の夢』や『冬物語』の風景的背景である。民衆詩や民衆祭や、樂しい古英吉利が、それの晴れやかな輝きをなほ國土の上に投げて居る。『馴らされた悍婦たち』の序劇や、『陽氣な女房たち』の中の多くの事柄は、蓋しこれらの青年時代の人物や場面を、われらに思ひ起させるのである。民謠と傳說とは、彼がなほ遍歴して居た時代に彼の藥籠中に入つて來た。この頃また一切の印象に對して開放されたる彼の魂に、動植物のもろもろの形像が印銘された。この動植物界の中を、地主の息子や、恐らくまた激情的なる狩人が（近所の田舍貴族の禁獵地に於ける彼の狩獵の物語を、誰れが憶ひ起さないであらうか？）、晴やかに動いたのである。また惟ふに、こゝには彼の戯曲に出る無識な小農民や小市民をだしに使つての無數の冗談や諧謔を知得すべき機會が、充分にあつたのである。そしてこの晴やかな生活の中へ、彼の國土の偉大にして又陰慘なる過去がこゝで既に聳入して來る。と云ふのは、ストラトフォードからロマンティクな街道を行くこと八哩にして、ヴァリク（又はヴァリック）（Warwick）城へ達するのであるが、この城の中庭では、或は堅牢なる塔と塔との間を、またはあまたの墓標の間を、過去の亡靈たちが――このなかには、また偉大なる國王製造者（と呼ばれたるリチャード・ネヴィル〔Richard Neville, Earl of Warwick 1428—1471〕）の姿が

交つて自書徘徊したのであつた。更に二三哩行くと、沙翁の親戚の一人が奉仕して居たレスター(伯)に當時所屬せるケニルヴァース(Kenilworth)があつた。註釋者たちは、この地で女王(エリザベスのこと)が、その寵臣レスターの爲に催したる大饗宴に、當時十一歳の少年なりし沙翁が列つたと好んで想像したのであつた。

然しそれはともあれ、詩にあらはれたる生の映像は、惟ふにストラトフォードそのものに於て、夙に少年シェークスピアに近寄つたらしい。その出納課の勘定書に於て、三鞭酒とクラーレト(佛蘭西産の赤葡萄酒、特にボルドーを云ふ。——譯者註)を肉荳詩とが輕からざる役目を勤めてゐたこの陽氣な町(ストラトフォールド)は、千五百六十九年から千五百八十七年に至るまでに、——即ち沙翁の少年時代と青年時代とに亘つて、——俳優團の二十四回より少くはない訪問を受けた。ゲエテとディケンズとは、いかに蔫作中の人物が、早い少年時代から彼等の現實生活に織り込まれたかといふことを、異口同音に物語る。「私は私の好きな人物たちを、私自身の小さい惱みに置き換へることによつて、がうした惱みに於ける私自身をどうして慰め得たかは、私自身にとつても不思議である」と、ディケンズは談る。私は丸一週間、トム・ヂョーンズ(英國のフィールディングの傑作小説の主人公の名、書名は次の如し。——譯者註 The story of Tom Jones, a Foundling. 1749〔Henry Fielding 1707—1754〕)(無邪氣なトム・ヂョーンズ、無害な人間)であつた。また私は、私自身が眞に信ずるところに依ると、丸一ヶ月の間ぶつつゞけてロドリク・ランダム(Roderick Random 蘇格蘭の小説家 Tobias Smollett 1721—1771 この作で二卷より成れる小説の主人公の名、書名は The Adventure of Roderick Random 1748——譯者註)について私自身の想像を貫徹した。近隣のいづれの穀倉も、教會にあるいづれの石も、また墓地のいづれの寸地も、私の精神のなかでは、これらの書物と或關係を持ち、これらの書物のなかで有名になつた或場所を現はして居た。」これらの思ひ出は、沙翁の少年時代の生活に、傳説中の又は舞臺上の人物らが押し入つて來て、ヴァリクシャイアの歴史的場面の上で、過去のいろいろな人物が、彼の眼前に活動し初めた有樣に就て、どういふ風に想像してよいかを、われらのうちの何人かが

なし得るよりも、遙かに良く陳べて居る。

彼が既にストラーフォードに於て人生の紛糾を、早くして知つたと云ふ事を、承認すべき鞏固なる理由がある。そして彼の父の事業上の困難は、彼をして夙に冷酷なる現實の内面を窺はしめたのであつた。この事もまた後年ディケンズの繰り返へしたところであつた。未だ若冠にして彼は既に愛と結婚との情熱的な經驗をなし終つたのである。かくして倫敦時代が來た。青春時代に於ては、決して背後を顧みる事なく、極めてあぶなつかしい事も、これを眺めるよりは寧ろ之を實行したる彼は、(夫の思慮深い・自己を意識せる・そして外見上では自己を抛てるにも拘らず、根本的にはいつも自己を全然的に統制せる若いゲエテの人格とは、何たる對照だらう!)——そして恐らくその旅行カバンのうちには、あまたの原稿を詰め込んでであらうが、やがて倫敦に出て來た彼は——座附作者兼俳優といふ地位の上に、彼の生活計畫を立てたのである。彼の入つた地球座(グローブスシアター)の一團は、女王の宮中とやゝ近い關係を持つて居た。そして、

沙翁は僻命によりてヤーコブ(ジェーコブ)の下に、國王附俳優として採用される事になつた。彼の十四行詩はこの運びが、いかなる新しい影を彼の生活の上に投じたかを感動深く述べて居る。彼を引きつけたものの何であるかは、ゲエテやディケンズの演劇に對する情熱を眺め、またモリエールやゾーフォレスの事を考へるならば、明かに解つて來る。俳優と眞の創作詩人とは、——特に沙翁の方向に於けるそれとは——その天賦に關しては、自己自身をいろいろな人物に變化する想像の同一なる能力に基礎を置くものであり、詩人の言葉が欲することは、俳優の實行に於て初めて、完成されたる現實となるのである。

さてどう云ふ風に、沙翁その人の上に、彼の職業が働きかけねばならなかつたか? この職業は彼に單に舞臺上の智識を與へたばかりではなかつた。それ(職業)はモリエールに於けるやうに、彼にありても、自己を甚しく相異なれる諸性格に變化せしむる能力を、完成されたる妙境に入るまで作り上げたやうに思はれる。人々は俳優に於て、

彼が常に別個な人物になり、代る代る色々な役割に於て思考したり感じたりすることを認める。（一人で）あまたの個性の集合であり、またかゝるものとして世界と人生とを多趣多様に觀察し、自己自身を多趣多様に感ずることに於て、沙翁その人の天性中に存在して居たものを、俳優たる地位が、彼のうちに強化しないでは居なかつた。この解放されたる・そして一面では最高階級の人たちと結ぶと共に、他方では市の浮浪生活者たちと結びついた當時の倫敦に於ける生活境遇は、人生の變轉する色々の場面と、極めて多樣なる多くの性格とを、自らのうちに採り入れる絶好の機會を彼に提供したのであつた。そして座附作者たる地位が、彼の見たところのものを記すべく、彼の手にペンを執らしめたのであつた。

ゲエテは嘗つてエケルマンとの對話に於て、自分がヴォルター・スコトのやうな人物と比べると、生そのものの材料に關して、いかに不利なる位置に居たかを陳べた。彼は『ヴィルヘルム・マイスター』に於て、この小說に一つの潑溂たる動きを入れるがために、田舍貴族や俳優たちを採り用ひなければならなかつたのだと云つた。一般に、彼が考察しつゝ詩的勞作の性質を探ぐれば探ぐるほど、彼自體がいかに困難なる條件のもとに制作したのであるかが、愈々痛切に感ぜられた。然るにシェークスピアは比類なき歷史的恩寵のもとで書いた。彼がそのプルターク英雄傳のなかで、羅馬に關して讀んだ事柄や、英吉利の過去の時代の殘墟のうちに彼を圍繞するものや、暴力的なる人々と國家行爲の劇的處理と、及びその悽慘なる終末の場面とを有するエリザベス女王時代など――これらすべては本質的なるものに向けられたる天才の眼前に、能動的・英雄的な諸人物と暴力的なる大詰との一順列として現はれずに居なかつた。これらすべては云はゞ街上で見られ得べきものであつた。これらの街上を經て、女王が倫敦塔に騎行するのが見られた。自らの輕舸に乘じて、女王はテームズ河上を沿航した。沙翁は當時歷史を造つたすべての人々を直接目前に舞臺上で見たのであつた。中世に展開したやうな生の清新なる色彩、種々樣々な運命に於ける個性的にして顯著

なるもの、そしてこれに注がれて居る近世的な・且つ人文學者や自然研究者や政治家たちに於て訓練されたる眼――これが卽ちシェークスピアの立場である。

かくして結局、上述の事柄と、われらが彼の敎養に就て知れる僅少の事柄とが、相符合するのである。沙翁研究者たちの間では、彼に於て一人の自然生的天才を見ると信じた時代は全く過ぎ去つた。然し彼の敎養がどんなものであつたかは、想像され得るであらう。ベン・ジョンソン（前出）は、彼を以て僅少のラテン語と、もつと僅少な希臘語の智識しか持たぬとなして居るが、それは自己の古典的敎養に惑溺せる競爭者の言葉だと解されねばならぬ（ベン・ジョンソンは當時第一流の學者であつた。――譯者註）。古代の息吹を、それの言語と、それの文學の言語的色彩とに於て感ずることで、彼には充分であつた。兎も角彼は彼のプルターク傳（これを彼はすべての古代の書籍のうちで最好愛した）と、オヴィドとを飜譯で讀んだ。この點では、彼はシラーと本質的に異なつては居ない。彼がラブレー（François Rabelais 1494―1553 佛蘭西の僧侶にして醫學者兼文學者、此國の文藝復興期を代表する一人である。――譯者註）の小說『ガルガンチュア』（Gargantua フランソア一世を諷したと云はれる長篇小說で、同じ人の Tantagruel と相並んでその傑作である。――譯者註）を讀んだことは疑もないが、當時この書の英譯があつたやうに思はれる（そして沙翁はこれを讀んだであらう。――譯者註）。かくして彼はまたモンテーニュ（Michel Montaigne 1633―1692 佛蘭西の哲人兼文士。――譯者註）をフロリオの飜譯で讀んだ。フロリオは沙翁と個人的關係を有して居た。伊太利語の書物は、彼は恐らく原書で利用したであらう。然し沙翁が嚴密なる意味に於ての學術的興味を、少しも持つて居なかつた事と、自然現象の關聯に就て、或何等かの徹底的なる觀念を作らうといふ要求も持つて居なかつたことは、他の何事よりも確實である。然しながら、われらは各々の詩人に對して、神に關し、人間の永生に關し、或は形而上學の他の重要なる諸點の一つに關して、或何等かの難問を課すべき權利があるであらうか？天才の本質は洞察であり、專念である。あらゆる種類の人間の眼を以て、世界を眺めたる沙翁に至つては、一切の種類の思考方法と性格とに、精神的に力强く沈潛する事に於ては、あまりにも自由であつた。私は惟ふ、一個の精神的態度に立て籠ること

は、彼にとつては囚獄に居るやうに思はれたであらうと。成程思想辨證法の精細な事項すら、彼の興味を引いたのであるが、然しそれは單に諸人物の知的着彩として、情緒の活躍に對する知的材料として、或はまた人々が追蹤したがる色々の可能性として、彼の興味を引き起したに過きない。彼の十四行詩や戯曲には、形而上學的の諸説がこゝそこに現はれて居る。然し如何なる處まで、それらが持續的確信と見做されてよいか、われわれには解らない。彼が或内的關係を有することを示せる哲學は、運命の衝撃を忍耐すべくわれらを慰め且つ敎へる羅馬式の處世學であり、――從つてまた人文學者たちや、モンテーニュの哲學である。折々、人生は假象であり、夢幻であると云ふ意識が、彼を人生の悲劇以上に超出せしめる。然しこれまた彼の時代の文學に屢云ひあらはされたものであつた。

この偉大なる詩人と、當時の文學との重要な關聯は、一つの別な點に於て認められてよいのである。モンテーニュに對する彼の深い研究が發見された事は、事實彼を歴史的に理解するのに決定的な事柄ではあるが、この發見が既にわれらをそこに導くのである。卽ちこの別な點とは、人間の種々なる性格と情緒との、分析のうちに存するのである。彼の偉大なる戯曲の中に存する主要情緒のかゝる標本は、自然的の天才性の單なる贈物に過ぎなかつたと信じられるであらうか？　悟性的分析への彼の要求と彼の活動とは、彼がその裡に生活し、またその裡にあつて天才の專有的な洞察を以て、その精神生活を送りたる幾多の事の上に、――卽ち人間の天性、人間の性格の相違と思考方法の相違、人間の情緒とそれから流れ出づる運命などに、――向つて居つた。彼は疑もなく、彼の周圍に存する新文學の影響の下に立つたのであつて、此新文學は人間の精神的構成の極めて微妙なる縺れに至るまで、これを洞觀する術を敎へようとしたのであつた。無制限なる君主の威權と、宮廷の生活とは、當時の人々を人間の觀察へと敎育した。自己の位地を宮廷にて保つ爲には、氣を着け・心を配る事が甚しく必要であつた。この社會に於ては、萬事が個人的であり、また凡べては、いかに他人を洞

察し、またいかに自分自身の利益に適應して、自己を他人に示すかといふ事に懸つて居た。この需要に應じて、今や無數の書物があらはれた。これらの書物では、人相・姿態・態度などが、性格及び內面狀態の標徵として討究された。人間の種々なる激情が、記述されまた分析された。人生に就てのこれらの省察は、無數の運河によつて各人に達した。これらの文獻によつて飽和させられ・規定されたる人々と、彼は常に交際して居た。かくしてわれらは、個々人の構成を、その體內で血液の流れるのが見へると信ずる位に透明にして見せる彼の能力を、理解し得るのである。かくしてまた彼の持續せる考察は、人生に於ける性格と激情と運命との大なる關聯の上に向けられた。こゝでは羅馬文學で築き上げられた人文主義の思想が、新敎主義の思想の眞髓と一致して、沙翁の思想を決定したのであつた。それらは彼の體驗から或新らしい深味を受取つた。沙翁の戲曲は、人生そのものの鏡である。それらはわれわれを慰めはしない。然しそれらは、歐洲文學の他のいかなる產物もなし得ざる程度で、人生に就てわれら

に敎へるのである。

彼が或題材に於て、或詩作の動因を展開せしむる場合、通常彼は傳說中に於ける特殊のものや、一見して矛盾するものを、しつかりと把持するのである。かくしてこの題材は、現實の大地の匂ひを保存する。彼はこの題材を解釋する。彼はそのものから深奧なところを捉へる。彼の人物らには、往々にして或理解しがたきものが殘留する。觀者は、人間を人生そのものに於て見る通りに、——外面から內部に向つて、これらの人物を洞觀しなければならないのである。

シェークスピアにありては、當來の人間又は未來の狀態に就ての或理想の方向が、いづこにも見出されない。彼は自己を圍繞せる社會的世界を、或變—難き自然秩序の如く考へる。彼は當時の英國の君主政體的貴族的なる世界と、完全に調和して生活する。この世界から彼の戲曲の生の諸問題が生れて來る。彼の人物らは、彼がそこで見出したるものの强增されたる映像であり、しかもそれは、この社會の裡に存立した價値感

情の方面に於て強増されてゐるのである。批評の些の痕跡もなく、否寧ろ滿足を以て彼は、他人の頭上を越えて歩み行く幸福なる人々や支配者たちと、思ひ上つて居る田舍貴族や、笑ふべき學者たち、或は冒險者連・山師たちとの間に於ける對照を眺める。この對照の上に、二重の動作が、否彼の戯曲の二重の世界が基礎を有するのである。

もとよりハムレットは、自らの地位と官職との安全の裡に居て、不幸なる人々を眼下に見下す人達の僭越さや、法のたどたどしい歩みや、貧窮に對する輕蔑に就て、手強く且つ辛辣に述べては居る。また彼の十四行詩を見ると、沙翁自身がこの貴族社會の壓制に於て、――またその宮廷世界の寵兒であり、それでもこの宮廷世界の秩序のうちに、何等の確乎たる地位も名譽も持たざる俳優の不安定な立場に於て、――いかに重荷を背負つたかと云ふ事がわかる。然し彼はこれらすべてを、或運命として、――彼がその戯曲に描いた人生のすべての力と美とが、同時にそれに結びついて居る社會のこの秩序から流れ出づる或運命として、――甘受するのである。

これ蓋し事物のこの貴族的な秩序が、シェークスピアの人物らの生の感情を規定するからである。彼の悲劇の主人公たちは、自己の權力の感じに於て生活し、彼の喜劇の高貴にして快活なる人物らは、人生の惱が彼等の爪先にすら觸れないと云ふ誇りやかな意識で生を弄ぶ。すべてこれらの人物は自分自身に就て最高い・最鋭敏な感情を持つて居り、また同一の高貴な生活を送る人々を尊敬する。そしてこの貴族的秩序から、また外部的光輝が生ずるのではあるが、この光輝は彼等及び彼等の周圍を包む。またこの光輝なくしては、これらの戯曲の效果は考へられない。武器に充ち滿ちたるマクベスの巨大にして幽鬱なる居城、相敵視する貴族らの堅固な家屋に圍まれたるヴェロナの街道、その部屋部屋には祝ひの歡聲と死のにほひとが、奇妙に交錯せる丁抹王の堂々たる居城、憂々と鳴る戎具、王者らのはでやかさ、高僧たちの嚴かな服裝――これらすべては彼の人物と事件とを高揚する。丁抹王クラウディウスやマクベスやリチャード三世の罪業の物語を、今日の或王城の部屋に於て想見するのは無益であ

らう。また帝王の行爲や運命のうちにすら、或抑壓せられたるもの、或複合されたるものゝ、またはわれらの生活の必要事項から流れ出づる凡百の事情によつて拘束せられたるものが、入り込んだ後に於て、これらの物語を、それらが今日演ぜられる大都市の一隅に移して見ることも、絶望的なわざであらう。

また當時の貴族社會の階級別のうちには、彼にとつて、最高種類の多趣多樣な藝術的效果が含まれて居た。私はこゝにそのうち只一つだけを取り出して見よう。オペラの音樂は、個々の人々を同時にその特性に應じて音樂的に自己を述べしめる事によつて、情調と性格との多樣性を生の統一に結びつけ、存在の豐かなる內容を、唯一の瞬間に總括する事が出來る。然し戲曲詩人には、この效果は拒まれて居る。さりながら彼の詩作のうちに存する音樂的なるものは、單に作中の各情詩的な人物たちより出發せる內面的音樂からのみ生ずるのではない。それは觀者の記憶のうちに成立する全體の總體的效果からも生ずるのである。戲曲が前方へと進行するにつれて、生の感情に

於ける及び人物らの特性に於ける色々の對照は、相續いて（前後的關係に於て）あらはれて來る。そして不調和と調和とに於けるこの多樣性は、觀者の記憶のうちで總括される。かくして、云はゞ種々の音階が入り亂れて響き合ひ、その故に生の豐富さと生の混合されたる特性とに就ての感じが生ずる。今や沙翁は、彼の社會に於けるかくも多樣なる階級別と、またこの社會に於けるかくも强度なる諸對照を、意のまゝに驅使することによつて、特殊の强さを有するこの效果そのものを生み出すことが出來たのである。

最後に、英吉利精神の一般的方向と、沙翁の詩の特性との間に於ける或關係が擡頭して來る。但しこの關係は、勿論各のより精しい限定や基礎づけの達しがたいものである。經驗主義とこれに相應する歸納法的好愛とは、英國に於て、この國民がその憲法の完成に示したのと同一の論理的正確さを以て發達して來た。プラトーンとアリストテーレスとは、この國ではベーコン時代このかた何等の權威ある影響をも、思惟の

國民的傾向の上に與へては居ない。單純なる觀察者も、方法的な研究者も、清新にして、比較にならぬほどの自由さを以て、彼等を圍繞する自然的並に社會的事實の知覺と研究とのうちに生活するのである。恰も沙翁の時代に於て、プラトーン主義が最大の勢力を持つて居た如くに、哲人や神學者たちの間に於て、他のいろいろな方向が主宰したらうとも、そしてそれらがより廣い社會の思想生活を規定したらうとも、それらの方向は英吉利精神の經驗的傾向を、寸毫も變じはしなかつた。シェークスピアやベン・ジョンソンの如き人物に於て、またスモレットやフィールディングやリチャードソンの如き人々に於て、又はディケンズ、サカレー及ヴォルター・スコトの如き人たちに於ては、世界を觀察する詩的方法が、明かにこの經驗的傾向と一致するのである。夫の特に獨逸の影響の下に、バイロンやシェレーやコレリヂによつて代表されたる・上記とは反對なる詩の諸傾向は、決して英吉利精神に順應せるものではなかつた。夫故にこれらの人々は、英國精神に對して、或指導的にして持續的なる影響を與へることは、決して出來なかつたのである。

われらが今こゝに、シェークスピアの詩的創作のすべての特徴を總括するならば、それらは對照によつて、ゲエテの詩的根本方向を照示するであらう。歐洲文學に於けるこの兩者の地位は、既に本書（原完本を指す。譯者註）の緒論で說明された。この章で解說されたる兩者の差異は該緒論に補充的に加はるのである。シェークスピアは世界と生とに於て、彼の周圍に生起する事物に彼の精神のすべての力をさし向けながら、主として世間的經驗のうちに生活した。然るにゲエテの最獨自的な天賦は、自己の心情狀態を、彼のうちに在る理念と理想との世界を、外部に云ひあらはすことに存する。前者はあらゆる種類の生活と、あらゆる階級の性格とを、自らのうちに懷き、これを味到し、これを形成することに、それの全心全力を以て向つて居る。後者は繰り返へし繰り返へして、自らのうちを眺める。そして世界が彼に敎ゆるものを、彼は結局自らの自我を高めまた深める爲に利用したがるのである。藝術的創作物を、自己自身の外部に置く

ことが、前者にとつては、その生の最高の精神的業務であるが、後者にとつては自らの生を、自らの個性を、藝術品に形づくることが、最後のものとなつて居るのである。

ルソー

(Jean Jacque Rousseau)

近代歐洲に於ては、まづ第一にジャン・ジャク・ルソーが、その著『新エロイーズ』(La nouvelle Héloïse)に於て、他人や他人の狀態を認知し、または觀察することへの或卓越せる天賦も習慣も持たずして、單に自己の內的體驗と思考との豐富な裡から、あまたの人物を展開せしむる方法でもつて、壓倒的效果を有する一個の藝術品を創造したのであつた。この偉人の不幸なる生涯には、或一個の人物を、その眞の本質に於て捕捉し得ぬといふ無能力が一貫して居る。疑問的な資質の人々と、洗鍊されだる人間鑑識術とにあまりにも富んで居た當時の巴里の複雜せる狀態にあつては、この一事は名狀しがたき不幸であつた。彼の激情的なる心情は、彼に向つて人々を眞いて見せ

たのであつたが、彼にとつては人々は實にこの通りだと思はれた。彼は全く自己自身のうちに生活した。それ故に彼のこの大なる小説（新『エロイーズ』）の成立史を跡づけるのは、想像の研究にとつては異常に興味多きことである。またわれらは、彼自身の『懺悔錄』やその書翰によつてこれを爲し得るのである。

が千七百五十六年四月九日、ラ・シュヴレト（La Chevrette）公園に在る隱棲所に移つた時、彼は四十四歳であつた。「この日を以て私は生活し始めた」と、彼は云つた。此所で魂の全き平靜により、自然と寂寞との魅力に圍まれて、彼は自らの想像が、彼の主義や彼の意志に反して、不可抗力を以て形態となつて働くのを見た。彼の主義や意志に反してと云つたのは、小説を書くことは、彼を彼自身及彼の最獨自的確信に對して矛盾に陷らしめたからであつた。彼にあつて基礎的過程となつたものは、彼が幸福に就て、また彼の感情と彼の深き激情とに適應する至幸なる境涯と人物とに就て、眼前に思ひ浮べたものを、夢想の朦朧たる霧の中より捉へ來つて、これを具象的なる

形像に固定し、これを形造ることであつた。この過程は、すべての偉大なる詩人たちのうちにあづかつて働くものである。そしてミランダ（沙翁の作『嵐』中のプロスペロの娘。――譯者註）も、ヘルミオーネ（沙翁の作『冬物語』中の人物でシシリア王妃。――譯者註）も共に憧憬の具體化されたる夢想である。然しルソーにあつては、この過程が主導的なものであつて、この一番早い時代の形に於ける彼の小説全體を支配する。彼の青年時代から、彼の想像はこの方法で働いて居た。彼は『懺悔錄』の第四卷に於て、彼が自由なる自然裡にあつて、かゝる夢想的な詩作へと、いつもいかばかり（強く）刺戟されるのを感じたかを談つて居る。「その時は私は自由に振舞ひつゝ、全自然に君臨する。私の心は對象から對象へといそぎながら、自らの周圍に美しい形像を集める。そして恍惚たる感情裡に陶醉する。私が今や私の內的の喜悅の爲に、私の思想のなかでこれら（の形像）を仕上げるとき、いかなる繪筆の力、いかなる色彩の鮮かさ、いかなる表現の强さを、私はそれらに與へるだらうか！　このすべての事どもは、しかも私の年齢の傾ける頃に書いた諸作のうちに發見

されると人々は云ふ。」彼の生涯中のこの時期は、かゝる夢想に或大なる力を與へたのである。「私は老年期に於て、苦しい病氣の獲物たる私を見た。そして私が考へるところによると、私の心が渇望して居た喜悦のたゞ一つをも充分に享受することなく、また此心にやすらふ潑溂たる感情を營つて流出せしめたこともなく、また私の心に充ち溢れてゐたが、對象がないので、いつも抑壓され、たゞ私の嘆息のうちにのみ洩れ出てたるあの陶醉せしむる歡喜を味つたこともなくして、――否僅かに試味したることさへなくして、私は自らの生涯の終に近い私自身を見た。」「生きたことなくして死する。」――これぞ人を惻動せしむる悲哀の一觀念ではないか！

かやうな心的狀態に於て、彼は彼の周圍の寂しい・魅力ある自然に、――堂々たる樹木や、草や、眞紅のヒースなどに、――生命を與へたのであつて、それらは幸福に就てのすべての彼の夢想の實現の爲に創造されたるやうに見える一場面をなすのであつた。「私は私の心情の赴くまゝに、これらに充すに實質を以てした。私は樂しい思出

の結びつきたる・ありにし日の體驗を記憶裡に喚び戻し、私が今もなほあこがれる事の出來た幸福の種々なる形像を、生々した色彩で描き出すことによつて、私の趣味による或黄金時代を自ら創造したのである。」これは事實であつた。青年時代の體驗の色々な形像は、彼が今なほあこがれ得たすべての幸福を自己のうちに包括する一繪畫を、彼の想像に與へたのである。また、如何にしてこの事が起つたかに就て彼は述べた。「私は私の心情の兩個の理想たる愛と友情とを、極めて魅惑的な形像で想像した。そして私が常に崇拜したる女性のあらゆる魅力を以て、之を粉飾した。私は男の友人達よりも、寧ろ二人の女友達を想像したのであつた。何となれば、それらは（男の友達よりも）より稀にしか現はれないが、若し現はれたなら、その時にはそれこそ愈々愛らしいからである。――私はこの繪畫に、勿論完全（なもの）ではないけれど、然し私の趣味に適つた人物らを供給した。私はその一人の女に、一人の愛人を與へたが、この愛人にとつては、もう一人の女は情愛深い友人であり、なほそれ以上ですらあつ

たのである。然し私は或何等かの不快極まる感情を想見することが、私にはつらいので、嫉妬も悶着も許さなかつた。私はこの二人の愛らしい模型に魅せられて、出來得るだけ彼女らの愛人兼友人たる人物と私とを一致させた。然し私はこの人物を、若く・愛すべきものとなし、且つこれに、私自身が所有して居ると自分の意識せる一切の美德と缺點とを與へた。」

彼は舞臺をジュネーヴ湖畔に移した。この湖は長い前から、幸福に關する彼の凡べての夢想と織り合つて居た。「若し幸福にして甘美なる生活――それは私を避けるのだが、私はその爲に生れたと自らを感ずるのである――に對する熱望が、私の想像力に點火する時には、それはいつも舞臺として、ヴァート州（ジュネーヴの存する州の名。――譯者註）と湖水と、魅力あるこれらの山水とを取るのである。」と彼は云ふ。彼の人物はみなホメールの幽魂らの如く「若干の青年時代の記憶」から生命を掬んだのである。その他の特徴を、彼等はリチャードソン（Samuel Richardson 1689―1761 英國の小說作家。――譯者註）の諸小說より受取つた。これらの小說のうちでは、當時の凡べての多感なる魂が、あたかもより高き・より崇高なる現實のうちに在る如くに生活して居た。そして最後に或歷史的な材料が、これらの形像の上に形造的に作用するのであつた。――それはアベラールとエロイーズの物語であつたが、これは嘗つてまさしくこの巴里とその近郊とに起つた事件であつた。かくして彼は聯絡も結合もなく、ばらばらの書翰を紙の上に書きつけ初めた。「これらを結びつけようと着手した時に、私は屢々非常な困難に陷つた。次の事は甚信じ難いが眞實である。卽ち最初の二部は殆ど全部的にこの方法で書かれたのであつて、私には熟考を經た計畫はなかつた。否本格的の一作品を、それから作り上げようといふ誘惑を感ずるだらうなどとは、未だ豫見しなかつた。」

千七百五十六年から千七百五十七年にかけての冬の間、季節が彼を室內に閉ぢ籠めて居たとき、彼はこれらの紙片に、連絡と秩序とを與へ初めた。それはこれらのものから一種の小說を作り出す爲であつた。其時彼の夢想の實現として、卽ち彼がジュリ

ーと名づけた幻影の現實として、伯爵夫人ドウドトー（d' Houdetot）が、彼の生活に入つて來た。かくして千七百五十七年の春から、彼の小說の仕上げの第二期は初まるのである。この時期はこの小說の終結と刊行とに至るまで續いた。然しこの時代は、われらに取つては最早同じやうな興味を持たぬ。それはとりわけ、われらがこの小說に關して行はれたる變改を、最早個々に認識することが出來ないからである。主要なる變改は、以前に立案された少女理想への生活關係の代りに、今や彼の體驗した事柄により、或は彼がその世間的無識に於て想像して作り上げた事柄によりて、一人の既婚夫人への關係が現はれて來た事である。また後年ゲエテに於て明瞭に認められたやうに、ルソォが自らのうちに發見したる・そして互に異質的だと彼自身の感じたるものを、いくたりかの人物に分ける事も行はれたやうに思はれる。

獨逸國では、近代諸民族の英雄時代に於て既に、個人的文學の同一性質を具備した二個の作品が、われらの前に現はれる。獨逸の騎士的敍事詩が、その流を掬んだ・あのロマン民族の物語文學の研究によつて、われらはまた前者へ（騎士的敍事詩）のより深い理解を得るのである。獨逸騎士敍事詩の作者たちのうちで、最天才的な二人の人物たるヴォルフラム・フォン・エシェンバハ（Wolfram von Eschenbach 1170—1220）と、ゴトフリート・フォン・シュトラースブルヒ（Gottfried von Strassburg 千二百二十年頃歿）とに就ては、彼等の諸典據に對する關係に就て、未だ一致した意見に到達しては居ないけれど、この二人の詩的取扱法が、高度の蓋然性を以て推定され得る位までには、この關係は明かにされて居るのである。

ゴトフリートの主觀性は、彼の詩全部に浸徹して居る。彼が騎士道の敍事詩人たち（その最大なるものを除いて）や、その敍情詩人らを讃美する莊麗なる言葉に於て、彼はゲエテ式に詩を讃美して、詩は各人のうちに青春を新たに招き、生存の勇氣と人生に對する喜悅とを喚びさますものであるとして居る。これが詩作に關する彼の理想であつて、それはプォルフラムの粗剛で陰暗な物語とは（性質）相反するものであつ

た。ゴトフリートは騎士氣質の生え抜きではなかつた（所謂騎士文學の詩人たちのなかで、彼丈けは市民階級の出身である。――譯者註）。彼はその題材を、それが彼自身の明るい人生觀の、――恐らくは個人的事情及體驗ずらもの、――容器たり得たがために採り用ゐたのであると、われらは信じたいのである。その作『トリスタン』の二個所に於て、私はこの詩人自らが、いかに愛の喜びと悲しみとを體驗したかの示唆を發見する。それは發端と、極めて深い自然の寂寥の裡に於ける戀愛生活を書いた有名なる歌章とに於てである。これに對立する一つの別な言葉は、この關聯に於ては、讀者たちに對する詩人のからかひ的な戯れであるやうに見える。豊かなる生の享樂に對する確乎たる感じ、聰明なる・否狡獪なる處生法に對する斷乎たる好愛、婦人たちの性格に對する輕蔑と、それらのものの愛の魅力に對する恍惚たる傾倒などは、彼の作にロマン民族的な短篇小說の印銘を與へるものである。「生命の日が彼にかゞやく間は、彼は生ける人たちと生活すべきである。」ゴトフリートは然しこれと、非常なる心理的の深さ、極めて豊富なる經驗から得たる心情狀態の描寫などを統合する。既に序言に現はれたる・また到るところで意味深く反覆されたる此著作の根本感情たる「愛のなやみもまた至福なり」と考こそは、眞に日耳曼的である。この結合が、詩に謎みたいな・そして全く個性的なる或ものを與へる。生に就てのこの混淆せる根本感情から出發して、全體が動作の透明なる簡易さで形づくられて居る。ルソーの作品の如くに、ゴトフリートの作もまた全く、戀する二人との人々の運命とに對する興味に基いて居る。戯るゝ魅惑、狡獪なるおどけに對する喜悅、極めて大まかな處生哲學、教會の勢力と法律秩序への教會の干渉とに對する殆どあらはなる憎惡、騎士道の理想に對する同じく殆んどあらはなる嘲罵（これは既に後年のセルヴァンテスやアリオストの先驅をなすものである）、――この兩者（即ち惡憎と嘲罵）は、これがすぐれたる世俗心を以て、樂に言ひ表はされゝば表はされるほど、愈々效果あるものである。――總ての關係の法律的側面に對する・及び一種の法律的辯證法の云ひ廻はし方に對する特別の趣味、すべてこれらの特徵は、感情と人格との主觀的

な君主權を以て、この敍事詩から出現して來る。

ヴォルフラムの比較にならぬ程、より高い地點に立てる詩的能力は、彼の詩に於てずつと多樣的にあらはれる。靜かなるフランケン洲の居城に住める・而して王侯に腰を屈せざる・僅少の領地しか持たないこの騎士の誇りやかな・男らしい・力に充ちた個性を――彼の描いた勇士たちのやうに、愛人そのものから、彼の詩歌の爲ではなくて、彼の勇敢にして好戰的な武士らしさの爲に愛せられて居たらしいこの騎士の個性を、――われらは（前揭の）ゴトフリートの個性よりも、より判然と認識するのである。その著『バルツィーファル』の序に於て既に、一つの理想が讀者の前に立てられなければならぬことが告げられて居る。それは云はゞ、幸福に見落されたるこの騎士の寂しい魂のうちに灼熱したる最美しい騎士生活の理想である。そしてこの理想は、これを構想した人物の內的鬪爭の鏡だと、或程度まで見做さざるを得ざる或發展のうちに置かれて居る。この敍事詩は、それ自らのうちに發達小說（主人公の心的發達を敍述するを目的とする小說。―譯者註）を藏して居り、『ヴィルヘルム・マイスター』に於けるやうに、對照的强化と補塡との爲に、主要人物の傍に、いろいろな人物が置かれて居る。ヴォルフラムは（『バルツィファル』に於て）少年期の憂鬱から、懷疑と目標なき冒險とを經て、神の爲に戰ふ騎士の最高なる生の職分への男らしく熟考せる獻身に至るまでの生の統一を描くのであるが、かやうな統一（の描寫）は、われらがそれを知れる限りに於て、全中世文學中唯一無比のものである。かゝる統一は深い個性的經驗と思想的に深奧なる體驗とがなければ、全く考へられない。されば獨逸の二人の偉大なる騎士的敍事詩人は、彼等の前に存するロマン民族的な材料のなかへ、個人的體驗と自主的に獲得せる・關聯ある人生觀とを入れたのである。

われらは今やゲエテに向ふ。

ゲエテ

一

自然はゲエテに、その豐かなる賜を惜氣もなく與へた。美と强い生の力と創造的なる天才性とがそれである。彼の發展は、あたかも獨逸國に於て經濟生活や、市民の交通に於ける法律上の安全や、宗教上の自由が、絶えざる進展をなしつゝあつた時代に當る。家庭生活と社會組織とに關して、舊い新教時代から傳はり來れる牢固たる拘束は、今や弛み始めた。個人はより自由なる運動の餘地を得、彼等の感情生活は自らの行路を求めた。個性のこの解放は、佛蘭西及英吉利の著作家たちの影響によつて增

强されたのである。

かくして獨逸の詩的文學が成立した。その理想は個人的生活の理想であり――愛・友情・獨逸氣質を以て解釋されたる人道・鄕土感情・自然を悅ぶ心等がそれであつた。この詩作の春がゲエテを圍繞した。彼自身は上ラインのほとりとマイン河畔とに於て、自由都市と溫和なる寺領とに發達せるフランケン風の種族的氣風から、自己の個性を悅んで感じ、他人の個性は之を認め、その日その時の享樂に生きるといふ天賦を受け取つたのである。古い帝國直屬市（無論フランクフルト・アム・マインである。――譯者註）に於ける彼の家族の門閥的な地位は、彼に自意識と自信と妨げられざる運動とを與へた。學校の束縛と訓練とを持たざる無規則な教育は、彼の精神力と彼の想像とに自由なる發展を許したが、しかしまた自己の氣分に全く自己を委かせるといふ傾向に、自由なる開展を許したのである。かゝる天資の人物にとつては、人生を馳けめぐつて、その含有せるものを味到し、そしてこれを發表することが、第一の要求であつた。青年時代に於ては、折々激

情に全く征服された。彼が半ば未だ少年であつたとき、（少女）グレートヒェンの運命に關して取りのぼせ、家庭に禁足されてゐる間に、身を地上に投げて涙を以て床を濕ほし、この部屋を二度と出ることを拒み、遂に劇烈なる病氣に陷るまで、あはれなる少女の惱みに關する空想に全く身を委ねたことは、人の知るところである。ライプツィヒでは、彼は劇場で愛人を眺める爲に彼の病室から飛び出したが、そこで熱病に襲はれ、「すぐにも死ぬ」と「考へた」ほどであつた。この時代の激情的な擧動の爲に、肺の或疾患が生じたのである。然しこの場面の後、二三日にして彼は、彼の戀愛の激情の頂上に立つて、その親友に書いた。「私がこゝで何を感じ、如何なるすべての事を思ひめぐらして居るかを想像し給へ、――そして私がこれで終るのなら、私は彼女を私に與へざることを、神に願ふのだ」と。これ蓋し極めて激しい熱情に於てすらも、彼はいづれの個々の境遇も、彼に滿足を與へるのではない事を、いつも意識して居たからである。自らの全き充實と自由とに於ける體驗と――これこそは彼の要望

するものである。各種の生活に對する殆んど女性的なる同感、またこの生活を模作しつゝ高度となす想像は、彼をしていかなる生活境遇へも、自らを移入して感じさせるのである。彼は凡べての境遇に於て、それらに内在する幸福や、生活の向上に對するそれらの價値を、全部的に捕捉する。彼は自らに類似せる各の天性に密接に近づき寄り、これを理想化する。そしてこの境遇を、それの全體の意味と美との方面から充分に味到する事に於て、自己自身の生の感情を高めて行く。然しいかなる關係と雖、彼を束縛することは出來ない。彼はいづれの戀愛もそれが彼の桎梏になつてはいけないと云ふ祕密なる意識に伴はれて居る。いづれの友情關係に於ても、自らの優越といふ感じが、壓倒的に動いて居る。そして別離と罪過とが入り來つた時には、彼の想像は、他人の惱みを極めて手痛く彼に共感させる。幾多の生活境遇を充分に味到する力と喜びとは、彼の裡に甚力强かつたので、この境遇のあなたに在る・またはこの境遇の上に在る精神の自由に對するいかなる要求も、彼にとつては存立しなかつた。これ

が彼の本質の特徴であり、これによつて彼は自然でもあり、又自然の如く、或は良い方へ、或は惡い方へと活動するのであつたが、彼は何事に於ても、自然そのものを超越しようとはしなかつた。全く激情的でありながらも、彼の必要とするものの意識に於ては、また全く悟性的であり、種々の境遇を支配し人間を强制しつゝ、彼はあらゆる種類の力を、自らのうちに作り上げたけれど、たゞ境遇と世界とに對して鬪爭的に對抗する抽象的な道德的な力のみは別であつた。シラーの道義的な偉大さに對するゲエテの純眞なる賞讃は、これによつて說明される。この賞讃はまさに、彼自身がかやうな道德的の力を必要としないが故に、その故に純なのである。同樣にまたこゝでそれ自らが自然であり、また自然そのもののやうに働くゲエテを、藝術家として賞讃したるシラーの言葉も首肯されるのである。

彼の青年時代に彼に接近して居た人たちは、或計算し難きもの、或鬼魔的(デモーニシュ)なるものを經驗しなければならなかつた、彼は彼等にとつては、彼等の生活のうちに手に差し入れる運命となつた。ゲエテが突然『ヴェールテル』を發表した時に、この事を單に婦人たちのみならず、ケストネル(Johann Chritian Kestner『若きヴェールテルの惱み』のなかの人物アルベルトのモデルだと目された人。——譯者註)も感じたし、『諷刺惡口劇』(Schand-und Frevelstück)なる『神々と英雄たちとヴィーラント』が公けにされ、若い人たちに反感を起させたとき、ヴィーラントも之を感じた。それからラファーテル(Johann Kaspar Lavater 1741—1801 宗教的の詩の作があり、また骨相學の研究がある。後者にはゲエテも協力してゐる。——譯者註)もさうであつたし、またずつと後年になつてからの事であるが、支配者に對する自らの反對によつて、ヴァイマールの寺院のうしろの陰鬱なる牧師宅でやつれ衰へたヘルデルも、またさう感じたのである。そして彼自身も深く生と自己自身とに惱んだ。彼の力强き詩人的組織が强烈なる情意の動きを要求したことは、この組織の屬性であつて、これらの動きは、云はゞ彼の生理的經濟の豫算に於ける經常費目であつた。これらの動きは彼から睡眠を奪ひはしなかつた。然しこの組織は心的にも彼を異常に惱み易きものたらしめた。青年ゲエテが自殺の考を懷いたのは、決して

單なる想像遊戯ではなかつた。恐ろしい不安が、折々彼を逐ひ廻はした。「私について人たちは云ふ、カインの呪（いづこへ行つても落ちついて居られぬ禍。——譯者註）が私の上にかゝつてゐると。」されば、彼の青年時代と初期の作品とを通じて、二個の根本的な氣分が貫いて居る。彼はいかなる場所、いかなる關係にも糊着しない。生のこの部分又はあの部分を求めるのではなくして、生そのものを求むるデーモン（鬼魔神魔）が繰り返へして、彼の裡に出現する。「幸福なる合一の瞬間には、相互のために作られてゐる魂は、最も多く誤解し合ふものである。」かくして彼には幾度となく、異つた根本情調が——即ち彼自身が平和を見出すであらうところのひそやかな場所を求むる欲望が、彼の心に生ずる無限の要求を或狹い境涯に於て忘れようといふ意慾が、生ずるのである。かゝる時には各の局限されたる生存が、彼にとつては羨望すべきものとなる。彼はその生活の裡に或落着いたもの、或確乎たるものを渇望する。これぞゲエテの精神の形而上學的特質であり、それは初には宗教的に、後には自然研究的・哲學的に現はて來た。全且一なる者に對して自己を捧げることに於て、完全なる滿足が、初めてこの憧憬の念に與へられたのであり、かく自らを捧げることが、個性的存在に附着せる意志の不安を鎮靜するのである。

かゝる天性（の人）には、いづれの生活境遇もあまりに狹隘に見えざるを得なかつた。父の家庭は彼を抑壓した。作法正しく規則立つた萊府の社會がさうであつた。その後彼は若き人々の間にあつて新しく力强い人類に就ての奔放なる理想によつて、この抑壓から自己を解放しようと努め、そして青年たちの魂がこの超人たる詩人に靡した時、彼の生活の個人的狹隘が、これに比べて彼には愈々苦しく感ぜられた。進歩に後れた此直屬市（フランクフルト・アム・マイン）の凝滯的な點や拘束的なところ、父の家に於ける無聊な辯護士といふ不滿な地位は、彼には堪え難くなつた。ヴァイマールに於て初めて、彼は公爵の友人・助言者及び大臣として國土の統治と君主同盟※の政策とに參加するに及んで、——この政策は他の獨逸諸州と公國との關係にも關し、また結局歐洲の種々

の關係とも關聯したのである、――廣大なるものへの彼の努力が必要とする活動範圍を見出したのである。

〔註〕※千七百八十五年プロイセンのフリードリヒ二世の發案により、墺太利皇帝ヨーゼフ二世の獨逸國への侵略に對して、伯林に於てザクセン・プロイセン及ハノーヴェルの間に締結されたる同盟で、Fürstenbund と云はれる。――譯者註

こゝで初めて彼に、行動の高貴にして拘束されざる自由が與へられたが、この種の自由は、當時にあつては、良い意味に於ても、惡い意味に於ても、宮廷世界のみが所有して居たのである。彼は自己の所有地（ゲエテはヴァイマール公園中にある一別墅を公爵から贈られた。これこそ彼にとつて本當の所有地である。此別墅は有名なゲエテのガルテンハウスで今に現存して居る。――譯者註）に於て、自然に對する鄕土感を得たのである。そして初めて、彼の魂を平靜で充した或戀愛を經驗したのであつた。彼の書簡は今や長い時期を通じて、純潔な・充實せる幸福感を云ひあらはす。然しこゝでもまた時のたつにつれて、或制約があらはれて來た。偉大なる活動への期待のうち、いかばかり僅かしか實現されなかつたであらうか！　彼の詩的制作は停滯して進まなかつた。若い文學時代の指導者（即ちゲエテ）は、自己がシラーによつて押し退けられるのを發見した。彼の名聲は半ばは既に過去に屬するものとなつた。そこで彼は彼の活動と勢力と享受との範圍を再び擴大した。伊太利に於ける制作、シラーとの提携及新しい偉大なる創作時代がヴァイマールに於ける彼の生活に廣大なるものへの眞の活動を初めて與へたのである。彼は、今やこのさゝやかなる首都（ヴァイマール）より彼の國民の文學を支配し、そして絕えず活動しながら、自己の影響が如何に世界文學の上に及びゆくかを經驗することが許されたのである。

然しながら今や、彼の生活がいかに擴大され、新しい活動生活への移行が、彼のうちにいかなる變化を喚び起さうとも、またその後の經過の中に如何なる事が起らうとも、生に對すゲエテの關係は、その核心に於て少しも變らなかつた。ヴァイマールで職務を執つた最初の十年間は、生を統御し、一切を自らの自己完成に利用すべき努力が、彼の生活の中心に立つて居た。彼の生涯のいかなる時代にも、フォン・シュタイ

ン夫人に宛てた彼の書翰の立證する通り、彼の內面の動きに對して、彼の聽覺がかくも微妙であつた事はなし、彼の本質をより高く敎養することへの努力が、かやうに强烈であつた事はないのである。彼は行動に於て自己の天性を發展せしめ、また之を知つたのである。彼は特に諸方の宮廷への旅行が彼に齎らしたる生の諸形象の新しい豐富さを味つた。彼は新しい境遇から生ずる內的狀態を觀察した。そして彼自らが體驗せるものを、彼の全靈を滿したる・夫の世間と人生とに通曉せるフォン・シュタイン夫人と共に味ひ、またそのものの意味を考慮することによつて、彼の體驗したものは、初めて彼にとつての最終にして最高なる價値を受け取つたのである。同樣に伊太利に於てもまた、各の對象は、彼によりて、この直觀に於ける享受の感じと、その享受によつて自らを促進しようとする意識とを以て捕捉された。彼の自己敎養と、詩作に於ける自己の本質の表現とは、ここでもまた彼の生活の中心點であつた。彼にとつては、この二つに役立ち得るより以外には何物もこの國に存在しなかつた。彼はその自傳に於て、世紀の終り以來（一七九九年にはゲエテは五十才であつた。——考註）同一狀態で止まつて居た自らの生活を纏めて書いて居る。造形美術に於ける實習と享受、實務に於ける活動、自然科學研究などが、彼の生活に於て廣大なる場所を保有した。然し彼はこれらを普遍的敎養への彼の方向と關聯させたのであり、また彼の眞の職分としての詩作に、その手工的方面に於けるすべての手段を考慮しながら、首尾一貫して自己を捧げたのである。彼自身と彼の鬪爭は終つた。彼は自己の價値について全く確信を得たる自らの個性の意識に於て、彼自らが好んで享受したる廣い生の諸經驗に沒頭しつゝ、あらゆる時代の偉人に交はりながら、また永遠なる諸力に對する彼自身の完成した個人的存在の無時間的な關係のうちに生活するのであつた。

ゲエテ　二

かゝる態度から、既に若くして、生に對するゲエテの斷えざる考察は生じたのである。これは傍觀者の持つ好奇心ではなかつた。彼は彼の無限なる印象受容力に於て生を統御し、またより落ち着いた心境を以て生に堪へることを學ばねばならなかつた。——詳しく云へば、生に於ける幸福の充實に於て、生の意味に於て、並に生の制限と生の惱みとに於て、これに堪へることを學ばねばならなかつた。されば彼の生活の上には、考察の一つの層が作られ、それが益々深く、愈々廣くなつて行つた。彼の書翰を見ると、いかにしてこの層が生そのものから立ち上つて來たかが解る。特にフォン・シュタイン夫人に宛てたるいくつかの書翰は、一人の人物が、他の人々の世界と運命とを、いかにそこで感じてゐるかを示す事に於て、無比なるものである。彼の見る世界のいづれの部分も、彼に向つて、生の力と意味とに關して、何事かを述べる。各の卓越せる人物は、彼にとつては或一定の具象化に於ける人間性の示現となつた。そして各の體驗は、生そのものの或殊相に就ての教訓となつた。彼は類ひなき敏感を以て、四季の交代に於ける、朝明のうちに於ける、或は夕闇のうちに於ける自然と自己との關係を感得した。彼は自らの魂のかくれたる深所に於けるいちいちの動きに耳を聳て、それより人生と人間の展開とを理解する。われらの生を貫いて行く極めて普遍的な種類の或關係が、いつも彼の眼前に浮んで居た。例へばそれは、われらの生に於ける小休みなき運動が、靜寂や强固に對する關係であり、個性を規定する全體と、個性の持つ力や恣意との關係であり、われらのうちに存する不變なるものと發展との關係、個性の獨創性と外部からの影響との關係である。そしてそれは最後に、われらの生の感じを最も深く且つ最普遍的に規定する關係——即ち生が死に對する關係である。何となれば、死によつてわれらの生存の劃界されることは、生に對するわれらの理解と、またこれに對するわれらの評價とにとつては、いつも決定的に重大なことだからである。この關係の悲劇性は、ゾーフォクレスやダンテやシェークスピアの文學に於ては、すべての生存を暗くしてゐるけれど、この關係はゲエテによりて、謂はゞ

彼の人生觀察の地平線上へと押しやられて居ることは、彼にとつて特徴的である。生に就ての全考察は、絶えず生そのものから湧き出づるのであつて、この故に彼の考察は、各の狀態の、各の個性の、各の生活境遇の體驗されたる關聯と價値とを同時に捕捉する。――卽ちそれらのものの深奥なる意義を捉へるのである。これは生それ自らかなす生の解釋であつて、一切の宗教と形而上學とからは獨立して居る。

生に就ての考察のこの層は、彼の詩作を生長せしむる母なる土壤である。彼の作の持つ汲めども盡きぬ魅力は『ウィルヘルム・マイスター』、『親和力』及び『詩と眞實』に於て最强烈に働いて居るが、この魅力は、かゝる處世智と處世術とが、いかにそれらの作に浸徹して居るかと云ふ事に存するのである。

個性と、これを繞れる境涯と、個性の教養とが、ゲエテの人生觀察の中心點に立つ。人事に關する彼の見解は、いつも彼自身が生の經驗に於て到達したものに依憑して居る。彼はこゝから出發して、歷史的過去を歷閲することに依つて、生はいづれの時代にも同一であると彼に思はれるに至つた。到るところで彼は、人性に就て彼が體驗したのと同一の諸變容や、性格の展開に於ける同一の不思議なる轉向や、同一の精神狀態を再發見したのであつた。されば過去のいづれの人物も、いづれの體驗も、彼自身の經驗圈内に落ち來つた或事或ものによつて、彼にとりての意義を有したのである。『永遠の猶太人』(Der ewige Jude ゲエテの雜詩中に編入されてゐる。――譯者註)では、基督が再度この世に降臨する。彼が初めて世界を見たときには、これは「不思議な混亂」と「秩序の精神」とに充ちてあらはれ、慾望の裡に戰きつゝも、それ自らをこのものより解放しようと努め、かくして慾望より解き離されると、またもや新にそれに纏はれるのであつた。そして彼が歸來したときには、世界は彼には「舊き世界の主なる闇黑の靈(卽ち惡魔)が、白晝に世界を日光のうちに輝かしく現はして、彼に示した當時のありさまと全然同じやうに、未だ全く肉汁のうちに横はつてゐる」やうに思はれる(人性の超時間的なることを表徴す。――譯者註)。プロメートイスもモハメトもファウストも、ゲエテを引きつけた。これら諸人物の精神

的内實こそ、彼にとつては人性そのものの超時間的な一變容であつた。道德的政治的な人形芝居の作と、それに近似したいくつかの斷篇とは、或現在的事實の描寫ではなくして、不變なる人間的行藏の描寫であつた。「諸時代の精神のうちに自らを移し入れる」喜び（『ファウスト』第一部五七一行參照。——譯者註）に就いての彼の助手（ヴアーグネル）の發言に對するファウストの答を、何人が知らないであらうか？「君よ、過去の時代はわれらに取つては、七つの封印を有する（即ち不可解なる義）書物だ。君たちが諸時代の精神と稱するものは、畢竟そのうちに時代が影を映す學者たち自身の精神である。」（『ファウスト』第一部五七五行—五七九行參照。——譯者註）『ゲッ』（Götz von Berlichingen 1773 戲曲及その主人公の名。——譯者註）と『エグモント』（Egmont 全完成は 1787 同上）とは、われらをしてゲエテの歷史的思索を、より深く洞見せしめる。兩者とも史的諸狀態の細部を描いて居る。それらは極めて大なる潑溂さを以て、過去の生活をあらはし示す。然しながらゲエテは、主人公たちへ、彼自身の體驗を移し入れ、また主人たちに働きかけた歷史的事情は、過去の時代に於ても、常にある通りの人間の行藏を、

（そこに）好んで再認する一靜觀者の氣分で描き出されて居る。鐵手を有する老人（前掲のゲッを指す、この人の右の手は鐵でつくられてゐた。——譯者註）の嘗つて記錄した諸冒險が（彼の自敍傳は千七百三十七年に出版された。——譯者註）、肖像畫的・風俗畫的に觀者の側を通過することのうちに、まさしく『ゲッ』劇の不朽の魅惑は存するのである。これらの冒險は、嘗つてこの冒險を生み出した、溢れ漲る獨逸的の力と潑溂さとの感情を以て描現されてゐる。その爲に、事件の內部關係や、事件の周圍に存する歷史的な諸力との關聯の客觀的認識を必要としないのである。『エグモント』劇は、歷史的思索の成熟時代に書かれたもので、オラーニエン侯とエグモントとの對話、攝政內親王とマヒィアヴェルとの對話の場面の如きは、蓋しゲエテの作中歷史的に最も深味のあるもので、これらの場面には、宮廷生活や國家生活に於けるゲエテ自身の經驗の拔萃がある。然し主人公（エグモント）自身は、自由に、人間的個性的のものにつくられて居る。その爲主人公は歷史的關聯に於ては、信じ難いものに——否、突き詰めると、非歷史的なものに——なつたのである。ニーデルランデの革命

に活動したる新教思想や、市民的自由思想などの力に就いては、エグモントの周圍には、あまりにも少ししか感得されない。偉大なる歴史的生命は、この戯曲を通じては流れて居ない。シラーはその戯曲に於て、到るところでその題材に於ける世界史的契機を看取した事によつて、新史劇の創造者となつたのである。

そこで讀者は、ゲエテの歴史的制作を檢閲せられよ！　彼は精神力の總和のみが、史的對象を捉へ得るものだといふ深い見解のもとに、自己の史的作品に於ては、所謂プラグマーティシュ（哲理的又は學理的の義。――譯者註）な方法を背後に放棄した。かくして彼は藝術家として史的對象に立ち向ふのである。然し科學としての歴史は、なほ一個の別な側面を有する。史的事象は、それを含める全體よりのみ理解される。それの因果關係と、それの意味とは、史家の眼前に普遍（世界）史的關聯が常に存在する事を要求する。史家は自己の對象を、自己がこれに對して公平な態度を採るべく努むる一個獨立の世界として、自己から若干の距離を隔てたる場所に移さねばならぬ。かくして初めて、歴史の

各部分を貫流する諸般の史的の動きが彼に觀取されるのである。觀察者と史的世界とをかく分離し置くことに對立して、ゲエテは史的對象に對する人間の自然的關係を確く把持する。彼はすべての彼の生の經驗を、史的事象のうちに直接に投入し、かくしてこれを一個の現前的なる對象となすのである。彼は嘆賞する。彼は自らその教を聽く。そして個性が彼の人生觀の中心點である如くに、彼は何よりも先きに個性を過去のうちに搜し求める。若し何處かで、精神の進歩なるものが示され得るところがあるとするならば、それは自然の認識に於てである。然るにゲエテの色彩學史は、この學の歩みに於て、單に「直線や螺線の形に於ける上昇と下降、前進と後退」とを見るだけである。彼は自然の客體（自然物）に對する人間の變化し行く關係や、理論の建成に於ける個性的なるものの力を、天才的に觀察する。然し自然認識の進歩の諸階段を規定する必然性に對しては、何等の眼をも持つて居ないのである。同樣に彼の現代史的敍述に於ても、彼の關心は、事物の今現はれ初めて彼の眼から隱れることの出來ない秩

序が、この事物を規定して行く大なる關聯の方へは向つて居ない。彼はこゝでも、彼の周圍の軍事的狀態と市民的狀態とに於て把握し得る・生活境遇や感情のいつも變らぬ形式に追從する。佛蘭西革命は彼のうちに、人類の解放に就ての何等强烈なる喜悅をも喚起しなかつた。そしてナポレオンの外來統治が、政治的の强さに於て獨逸國に存立して居た凡べてのものを崩壞した事に關して、深い而して持續的な悲みを（彼の心に）喚び起しはしなかつた。之に反してかゝる精神（の人）は傳記的叙述に對して必然的に最高の能力を持たざるを得なかつた。『詩と眞實』は人間が自己自身に就ての、及び世界に對する自らの關係に就ての傳記的考察の歷史に於て、劃期的なものである。すべてを綜合すると、ゲエテにとつては、歷史的觀察は、畢竟するに、生に關する彼の考察を、過去の中へ延長したものであり、人類とその諸境遇との永續的な形式の把握であり、最後には生そのものの全く普遍的な解釋である。個々の存在とその展開とのいつも反覆される諸形式の捕捉が、全く彼の心中に支配して居たので、人類とそれの進步、獨立價値としての國家、及び國家の權力の如きは、ゲエテにとつては、空虛なる抽象體であり、亡靈であると思はれたのである。

三

さてこの思想層から、ゲエテの諸詩作は生ずるのである。生と生の解釋とが、その基礎であり、個性がその中心である。ゲエテの詩的創作に對して決定的なる體驗と詩との關係がこれによつて規定されるのである。

人間社會は、詩人が自らのうちに人生を體驗し、人生が外界から彼に向つて步み寄るがまゝに、これを理解しようと努むる限りに於て、詩人にとつて存在するものである。理解に於ては、眞の詩人の豫言者的眼光は、無限なるものへと達する。何となれば彼は理解しつゝ、すべての彼の內的經驗を他の存在に移し入れるけれど、それと同

時に或他の偉大なる存在の、或は強力なる運命の測り知れざる別種な深さが、彼を導いて彼自身の本質の限界以上に進出せしめるからである。詩人は決して個人的には體驗し得ざるものを理解し、また形成する。されば、コリオーラン、シーザー、アントニュウスの如き人物は、沙翁の想像の裡で、いかなる史家も到達せざる明晰にして關聯ある現實性を受け取るのである。ゲエテも亦彼の人物ゲッや、オラーニエン侯が證明する通りに、かゝる天賦を、程よき程度で持つて居た。青年期の大膽なる戯曲的戯作より初めて、『ファウスト』の第二部に至るまでに見られるあの世俗事件を提示するところの、或は『ヘルマン』と『庶出の娘』(Die natürliche Tochter) とに於て行はれるやうに、存在の一範圍を、典型的な人物と境遇とに書き改むるところの天才的能力は、上掲の天賦と親緣的なものであつた。然しながら描寫が、彼の魂の深所から生ずる生の綜體感に充たされてゐる事は、こゝでもまた――とりわけ物語に於て――彼の創作の方法に特徴的なものである。即ちこのものは、或は強力なる生の愉悦として、或は卓れたる皮肉として、または『ヴィルヘルム・マイスター』に於ける如くに、生そのものの旋律のやうに、事件の經過に隨伴する。然しながらかゝる強さに於て彼にのみ特有的なるものは、彼の個人的體驗に對して、傳說や歷史や時代の出來事などが、その容器となり、その表徵となる場合に、初めて完全に現はれて來るのである。こゝでも亦、『ヴェールテル』に於て、『プロメートイス』に於て、『ファウスト』『タソー』『イフィゲーニエ』に於て、彼の題材は、彼にその體驗を增强する可能性を與へ、或は詩人が世俗の事象を、ファウストやメフィストフェーレスの如き人物に、皮肉的・愉樂的に對立せしむる時、それはこれらの人物の效果を高める。然し彼がこゝで世界に告げたる深い且つ新しいものは、直接に彼の體驗から湧き出でて、ヴェールテルやファウストやタソーや其他多くの人物の脈管に流れるのである。こゝでは內的過程の觀察と觀察されたるものの描述とは全然問題ではない。われらが自己觀察によつて經驗する事柄は、到るところで狹い限界に押し込まれて居る。そしてこの方法では精神生活

に關する科學的考察すら、普通に考へられるよりも、遙かに少ないものしか受け取らないのである。蓋しわれらは、自己の狀態にわれらの注意を向けることによつて、この狀態は餘りに屢々消えてなくなるからである。個人的經驗を述べる詩人の方法は、これとは全く別である。それは體驗と體驗されたるものの表現との間に於ける構成關聯に基づくのである。こゝでは體驗されたるものは、全部的に表現に入つて行く。いかなる省察も、體驗されたるものの深さを、言語によつてなされたるそれの表現より離はしない。心的生活のすべての轉調、心的生活内に於ける輕やかなる推移、心的生活の經過に於ける持續性などは、かくして表現によつて、われらの理解に近づけられる。廣義に取られたる敍情詩的なるものの豫見者的の意味が、こゝに存する。何等の觀察のうちにも入り來らざる魂の深所を、器樂がわれらに展示するのは、體驗と表現との如上の關係に基づくのである。さて自らの個人的體驗を、それの全き内實に於て表現に齎らすことは、ゲエテの最も獨特的な天賦である。既述の如き彼の言語想像は、この爲に一切の手段を彼に與へたのである。彼の比ぶべきものなき程に豐富な動き易い心的生活が、敍事詩に於て、戯曲に於て、並に物語に於て、遺漏なき表現に到達した事によりて、われらにすべての人間的内面を、より深く、より純に、より眞に理解すべく敎えたる彼の心的文學は生じたのである。若しゲエテを、歐洲文學の關聯に於て觀察し、これを歐洲第一流の詩人たちと比較し、また彼の及ぼしたる諸種の作用を跡づけて見るならば、上述の點は、われらの最大詩人の本來的な意味に於けるまた一つの別個なる特質である。彼はあらゆる時代を通じての最大の敍情詩人である。彼の『ファウスト』は正しくこの方向から生じた。そしてすべての彼のより重要なる敍事詩或は戯曲的の詩作は、心的生活の旋律と律動とに充されて居る。

さて然しながら、この包括的な精神が、表現に齎らしたる個人的體驗は、いかに廣汎なることよ！

彼は當初から自己自身に就いての强力なる意識のうちに生活した。彼は決して全部

的に諸對象に沒入してしまふことはなかつた。從つて彼は、自己自身と對象への自己の關係とを、同時的に感じ得たのである。彼の青年時代からのいづれの紙片も、醗酵する力に充てる彼自身を、或場面に於て呈示する一個の狀況畫に外ならない。されば彼の青年時代の詩も、或與へられたる瞬間に於ける彼の生存感情の自然的な・因はれざる表現である。ついで彼が『伊太利紀行』に於て、或は自然科學的及歴史的勞作に於て、大なる對象を取扱つて居るのを見ると、彼は通常讀者をしてこれらの對象に對する自己の關係を、彼と共に體驗せしめ、事物の對象性に專心するその悅ばしき力を追感せしめ得るやうに、これらの對象を描述するのであつた。

自らの個性を最高の完成へ高めようとするゲエテの努力は、歴史的の諸條件から生れた。當時の文學全體を通じて、われらの生活を高める事への方向が動いて居たのである。レシングが、そのうちにあつて、自己の生の理想へと向上の途を切り開かねばならなかつた夫の神學上の鬪爭は、最早終つた。新しい時代はこの偉人（レシング）が、なほ人生と世界とを、その圏内で捉へなければならなかつたところのあの制柵を、既に突破したのであつた。ゲエテの青年時代の僚友たちは、ヘルデルを先頭として、傳統の重荷から離脱して生活した。彼等は活動に於ても、享樂に於ても、すべての被等の力を展開させようとする意志によつて支撑されて居た。個人は人生が包含するものを、樂しみに於ても、悲しみに於ても、——無制限に——自ら經驗し思考し又味到しようと欲したのである。

然しながらゲエテの個性的の詩作を、レンツ（Reinhold Lenz 1750—1792）や、クリンゲル（Friedrich Maximilian Klinger 1752—1831）の如き彼の同輩たちの詩作から全然區別し、これを彼等の上に高めたる所以のものは、次の事に存した。卽ち自らの存在を充實させようとする努力や、自らの人物並に自らの生活のうちに存する凡べての人間的なるものを實現せんとする努力が、彼をして、精神上の諸力から、すぐれた諸人物から、また偉大なる諸種の運動から來て、彼を圍繞したるすべてのものを、

觀照しつゝ、理解しつゝ、體驗しつゝ、自らのうちに攝取すべく倦まざらしめた事がそれである。彼に特有なる精神の敏捷さを以て、彼は書籍のうちで、彼に適應したるものを把捉し、その他のものは之を放置した。彼はヴォルテールと相並んで、十八世紀の最普遍的なる人物であつた。然しヴォルテールの普遍性は、推理をすべての對象、すべての問題に適用することに存し、ゲエテの普遍性はすべての人間的なるものを追體驗的に理解することにあつた。凡べての理解が體驗のうちに基礎づけられて居るが如くに、この理解は彼にあつてはやがて再び自己自身の存在の擴大へと立ち戻つた。彼は嘗つて云つた。彼が常にあらゆる精神的發現から、根源的なるもの、神的なるものの、破壞し難きものへと立ち歸つたと云ふ事が、彼の道義的・文學的の生の建築の基礎をなして居るのであると。彼は異樣なるものを彼自らの生活に關聯せしむることによつて之を理解し、そして理解されたるものは、彼自身の開展の一要素となつた。彼の本質は非常に豐富であり、又彼の生存に無涯の廣大さを與へ、彼の洞觀に客觀性を與へようとする要求は、甚強かつたので、彼は時代の宗教的・科學的・哲學的の運動をも、彼の體驗のうちに攝取したのであつた。――それは、啓蒙運動の解放力や、聖書批評、ツインツェンドルフ（Nikolaus Ludwig Graf von Zinzendorf 700—1760 ザクセンの貴族、敬虔主義の宗教家、ヘルンフートといふ宗教團體の設立保護者、ヘルンフート派は英語にてはモラヴィア教徒と云はれるもの。――譯者註）教團（即ちヘルンフート派）や、ユング・シュティリング（Heinrich Jung-Stilling 740—18 7 宗教文學者、眼科醫、經濟財政學教授、宗教的著作『郷愁』は有名である。ヘルデルの友人、またシュトラース（ブルク時代のゲエテの友人である。――譯者註）及びラファーテル（前出九十七頁參照）などの宗教感情、更にヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann 1717—1768 有名なる古代藝術研究者『古代美術史』の著者。――譯者註）の希臘主義、シュピノーツァの復興、ヘルデルの新しい民族理解、カントの人間精神の自發性に就ての學說、自覺への彼の指示、探究し得べからざるものと探究し得べきものとに就ての彼の區別、有機的なる自然と藝術家の創作との間になした彼の結合、自然研究に於ける新發見、行動する生活への人間の美的教育に關するシラーの概念等々であつた。彼は絕えざる新しい流入によつて益々幅廣く、益々力强く流

れて行く河流の如きものであつた。自己教養と世界認識とは、彼の精神にあつては、一個のものであつた。さればゲエテの個性的詩作の唯一の偉大さは、結局この詩作に於て、最個性的なものと、より普遍的な運動の中から來て彼の本質の成分となつたものとが、極めて密接に結びつけられてゐるといふ事に存する。最大なる精神的の諸現象が、彼の體驗となつたが故にこそ、それらは彼の最獨自的な運命と結びつけられることが出來たのであり、また彼を感動させ、搖り動かす事が出來たのである。かくして――かくしてのみ、シェークスピア以後の最大の詩作、即ち『ファウスト』が可能になつたのである。

個性的體驗を、かゝる廣汎なる意味に取るならば、この體驗のうちに、ゲエテの詩作の根底が存したことは、何等の疑を容れない。ゲエテの自敍傳はこの事を明瞭に述べてゐる。そこでは人は夫の情緒的運命と私的激情とのみが活動してゐた一つの社會秩序に對立して居る詩人を見る。この社會秩序の慘めさは注意深く示唆されて居る。

同時にまた若い人々の頭腦の裡には、すぐれたる題材のみが、自然に忠實なる取扱によつて、眞正なる詩作の成立を可能ならしむるものだと云ふ認識の生ずるのが見られる。「然し私はこの題材を發見する爲に、すべてを私自身のうちで搜索すべく强ゐられた。私が私の詩に對して、まことの基礎たる感情或は省察を要したならば、私は私の懷に手を入れなければならなかつた。」「かくして私が私の生涯ぢう、それから離れることの出來なかつた夫の方向が――即ち私を喜ばせ苦しめ又はその他の方法で私を勞したものを、一つの像に、一つの詩に變化し、それらの事に關して私自身との清算を濟ましさうとする夫の方向が――始まつたのである。これは外物に就ての私の概念を是正し、またその故に私の內部に於て安心せんが爲であつた。これに對する天賦は、恐らく何人よりも私にとつて――その天性によつて絕えず一つの極端から他の極端へと投げられたる私自身にとつて――より必要であつたらう。夫故に私に關して知られたるすべての事は、一つの大なる告白の諸斷片に過ぎないのである。」此方向は『詩と

眞實』の第九卷が報告する通りに、當時の經驗的心理學とヴィーラントの文學とによつて增强された。兩者は共に「人心の隱れたる隅々への洞察」と「われらがわれらの胸のうちに或部分まで感じ、或部分まで豫感せる色々の激情の智識と、及び人が今まで之を非難して來たとしても、今やわれらには重要にして且つ價値あるものだと思はれざるを得なかつた種々の激情の智識」とを推擧したのであつた。これこそは最大なる價値を有する一つの箇所である。この個所はゲエテ自身が自らの生活を回顧して、彼を個性的の詩作に驅り立てた歷史的事態の威力をいかに深く感じたかを示すものである。勿論全く無制限的にこの威力を許容することは出來ない。この一般的狀態と、個性的天賦や、ライン及びマイン地方の氣質や、フランクフルト市が時代の政治的權力鬪爭から孤立して居た事などの間に、いかなる關聯があつたかに就ては、何人が之を云ひ得ようか？　と云ふのは、ゲエテの傍にあつてシラーは當時に存在したる別の一動因――卽ち大なる諸國家の權力鬪爭と、これに織り交つて社會のより自由なる形成への猛烈なる意志――卽ち行爲の世界とを捉へたからである。そして事實、いかなる歡呼的喝采がシラーを迎へた事であらうか！　ゲエテの途はより靜かであつた。ゲエテは最後の深所へと進んで行つたが、そこへはまた當時獨逸の音樂と哲學とが掘り込んで行つたのであつた。

ゲエテの詩作のこの根本方向は、今や注目すべき變更を經過する。千七百九十六年に於ける『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の終結までは、一切の彼の詩作は、個人的體驗より生じたのである。彼はこれらの詩作に從事しつゝあつた間に、この事に就て陳べたが、彼の其後の回顧は、これをもつと明瞭に證明する。これらの創作物の大多數のもの、及び最重要なるものに於ては、詩的過程は同一である。或氣分が外部的狀況の全體と共に、卽ち觀念に於て、狀態に於て、人物に於てこの氣分を圍むすべてのものと共に力强く體驗せられる。そして今や內面的に動かされた詩人を迎へて、これらの心情的經驗の容器となるに適當せる或外部的事件が步み寄り、この融合

のうちに、一切の性格的特質と全體的情調と全體の劃線とを、既に自らのうちに包有する詩作の萠芽が生じて來る。夫故にゲエテは、各の詩作が彼にとつては一個の告白、一個の懺悔であつて、彼はかやうにして、彼を壓しつけた種々の狀態から、內部的に自己を解放したと述べて差支へなかつたのである。從つてこの種のいづれの詩作にあつても、ゲエテ自身が、彼自身の作つた人物のたゞ中に居る。それは恰も詩『イルメーナウ』に於て彼がひそやかに彼自身を眺め、そして自らに話しかけるのに似て居る。動因（モチーフ）は彼自身の生活から掬み取られる。彼の書簡や、彼の詩歌に於ては、動因は或氣分であり、それはこれを生み出した事態と共に終るのであるが、やゝ大なる作品にあつては、動因は多樣な種類の生であり、これは大抵詩人の心血からその生命を受け取りたる一個の人物に關係するのである。然し生に對するゲエテの詩作のこの關係は漸次に變化して來る。特にゲエテがヴァイマールからシラーと共に獨逸文學の牛耳を執つて以來さうなつて來た。彼の生活は今や落ち着いた。體驗の充實と力强さとは減退した。そして對象的經驗の總和は非常に增大した。未來の理想は、過去の經驗の收得せるものを總括する事によつて代へられた。自然研究は、彼の理解の對象性（具體性）を强めた。今なほ彼の個々の事情が、深刻に彼の詩作に影響はするけれども、この詩作は然し、今や體驗されたるものの總和の上に、またこの體驗されたるものから生じた る世界に對する氣分の上に、その基礎を置くのである。或圓熟せる心が生に對する態度たるこの生の叡智は、ゲエテの生の後半の大なる敍事的諸詩作を靈化し・精神化するものである。彼の魂のうちに存するこの叡智の落着いた・持續的な力は、彼の敎訓的敍情詩の主題であり、それはまた『ファウスト』第二部を、世界そのものの模寫とするのである。

四

さて體驗することと、生の經驗及び生の理想は、しかしゲエテの早期から、一個の世界觀に凝結すべく努めて居た。そしてこの世界觀は、科學的の基礎づけを必要とする。この事は獨逸文學が一つの科學的時代に完成された事實から既に明瞭であつた。レシング、シラー及び浪漫派の人々は、その世界觀に科學的基礎づけを與へたのであつた。しかしこの要求は、近代に於ける最强烈なる想像的天賦を有する人物（即ちゲエテ）にあつて、如何なる强度を受取らねばならなかつたか。この人物は世界を詩的に眺める事によつて、自らの周圍の科學と矛盾に陷つた、そして自己の本質を擁護すべく餘儀なくされてあつた。そしてこの事は科學的に基礎づけられたる世界觀に於てのみ、普遍妥當的な方法でなされ得たのである。ゲエテを制約したる世界關係に於ける新しい側面は、かくしてわれらを迎へ出づるのである。

歐洲文學の間に於て獨逸文學は、すべての文化國を滿したる强力なる精神運動のた中にあつて、最後に發達したのである。十七世紀に近代科學が成立し、十八世紀にこの科學が、宗教的傳統の壓迫から人間を解放する事に對し、自然とそれに對する支配とに於ける因果律的關聯の認識に對し、精神的に歷史的なる世界をそのより深い關聯に於て把捉することに對し、また社會の改造を導くべき力ある諸理論に對して、その基礎を置いたのである。されば科學は人間を成人化した。教養ある諸階級は、人格の個性的な力を增强せしめんとする努力により、また古代の貴族的に君主制的なる秩序の制柵より個性を解放せんとする努力によつて充されて居た。この運動の影響のもとに、今やわれらの偉大なる獨逸文學は生じた。さればこの文學の開展過程とその特性とは、夫の歐洲の想像時代を充たし、そして科學時代の初めに及べる他の近代民族の先行せる國民文學のそれとは、全然異つたものでなければならなかつた。獨逸文學が初まつた時には、現實の把握は悟性的であつた。そして言語は、科學によつて形づくられたる或種の散文によつて規定されて居た。この國の文學は緩漫に且つ遲重に、その詩的描寫手段を創造しなければならなかつた。かくして獨逸文學はレシングに於

て、引締まつた動作（ハンドルンガ）を有する或新しい・力強い・寫實劇的な藝術を獲得し、クロプシュトクに於て、魂をその最後の奥底に至るまで震撼する詩的活力と表現力とを得、ヴィーラントに於て、優雅と穩かな叙事詩の流れと、生の表面に於ける輕やかなる變化を云ひあらはす言語とを得たのである。この困難なる前進に當りて、獨逸文學は然しながら、十六世紀及十七世紀の佛蘭西・英吉利及伊太利の文學よりも、一つの事をすぐれて持つて居た。それは偉大なる内實である。測り知れぬ科學的及び哲學的勞作が文學に先立つた。そして文學それ自らも、ヴィンケルマン、レシング、メーゼルントらの思想的勞作と極めて親密に結びついて居た。これらの人々は、精神世界の或新しい理解を創造したのである。そしてゲエテの時代に於ては、これらの研究は今や、天文學的・地理學的及び生物學的諸見解の結合のうちに或基礎を得たが、この基礎は、ビュフォン（George Louis Leclerc, Comte de Buffon 1707—1788 佛蘭西の博物學者、哲學者、彼は專門の學者と共に博物志三十六卷を著はし、後世に大なる聲を及ぼした。進化論の先驅者の一人である。——譯者註）以來、人間を宇宙進化の聯關中に置いたのである。獨逸では、ヘルデルがカントより出發しつゝも、然し同時に彼と截然たる對立をなして、この方面に働いたのである。

（Justus Möser 1720—1794 すぐれたる散文著作家、『愛國的想像』『獨逸語と獨逸文學とに就いて』などの好著がある。——譯者註）、ヘルデル及カ

ゲエテはこれらすべてのものに、無限なる受容力を差し向けた。彼はその中で、苟も彼の本質に適合したものは、之を自らのうちに攝取した。彼はそれらのものを增强し、また綜合した。今や彼には、その長い生涯に於て、獨逸精神がそれの最高の詩的・哲學的及科學的の成果に到達するまでの展開に、共働しつゝ隨伴して、——彼以前にあつては、彼よりはより狹い範圍ではあるが、ゾーフォクレス、ミケランジェロ、セバスティアン・バハ等がなすことを許されたやうに——その成果の諸要素を自らのうちに統合するといふ幸福が與へられたのである。

彼がそれらの諸要素を統一した方法は、彼に獨特なる理解の方法によつて決定されたのである。何となれば、彼の受容力は極めて廣大であつたやうに、彼の精神的熱度

はまた極めて簡單で、且つ到るところ徹底的であつたからである。直觀、想像、詩的資質が、彼の精神の諸力の中心點に立つて居た。現實を認知し・體驗し・理解することが、到るところで、またいつでも彼の態度の基礎であつた。この態度にありては、全體が諸部分に對する關係で進み行く直觀的態度が支配して居た。この態度は科學に於ては對象的思考として、詩に於ては現實に內在する法則によつて現實を增强することとしてあらはれる。當初から彼は生けるものを分解することとか、生けるものの部分的內容を說明する理論とかに對し、または哲學者らの長たらしい論證と、思考についての彼等の思考とに對しては、殆ど何等の好愛も天賦も信賴も持つて居なかつた。いつも彼は事物の統一と全體への諸部分の結構のうちに生きて居た。

自然は彼にとつては、一つの汎生命的なるもの（いづれの部分にも生命の充實せるもの。—譯者註）であり、彼が自分自身のうちに、創造して行く想像として體驗した形成力を意味したのであつた。この事は彼の少年時代からさうであつたが、時と共に組織的意識と科學的形式とに生長したに過ぎなかつた。何となれば彼の對象的思考と藝術的態度とが、內的に極めて密接なる關係を持つてゐたやうに、彼は到るところで、また種々な方法で、神と自然と、自然裡に於ける人間と及び神的世界の模作とを、一個の生ける關聯として眺めたからであつた。この見解は、初めはぼんやりした神秘的な汎神論的なる感情に包まれて居たのであるが、やがて彼の哲學的及び科學的の研究に於て明瞭の域に達した。それは彼が二十歲の頃であつたが、病を得てライプツィヒから歸來し、ツィンツェンドルフ派（所謂ヘルンフート派のこと。前出。—譯者註）の宗教心の圈內に投じ、パラケルスス（本稱 Aureolus Theophrastus Bombastus 1493—1541 醫學者、自然科學者、バーゼル大學にて初めて化學の講座を開く。種々の創見に富み、パラケルスス派の醫學の發生を見た。—譯者註）や、ヘルモント（Jan Baptista van Helmont 1577—1644 ニーデルランデの醫學者、パルケルスス醫學の信奉者、醫學上いくつかの創見がある。—譯者註）や、アーノルト（Gottfried Arnold 1677—1714 ルテル派の神學者、讃美歌の外に、當時有名なりし『公平なる教會史及異端史』（一六九九）の著がある。神秘的敬虔主義に立脚して居る。—譯者註）の教會史の異端者達に沈潛し、かくして宇宙進化に就てのグノーシス派（グノーシス卽ち神靈智識を中心とせる宗教思想を奉ずる一派、基督教以前にも、ゲノーシス中心說もあつたが、後基督教に入つて、その一派を成した。—譯者註）

の學說に逢着したのであつた。當時既に多樣なる展開へとひしめくところの湧き出づる汎生命（一切に遍在する生命の義。―譯者註）の直觀が、彼（の心）を滿した。つゞいて彼は宗教的形式のうちに汎生命的なるものを捕捉し、又そのうちに於て彼の不安なる心に對して平和を見出したのであるが、その後彼が、シュトラースブルヒに居る間に、漸次にこの宗教的形式から離れて行つた時、『プロメートイス』や『モハメト』『ヴェールテル』『ファウスト』第一部などに於て　相異なれる氣分のもとにありつゝも、凡べてに働く潑溂たる活力に對する同一の直觀があらはれて來る。この直觀は、彼自身の直覺的想像のうちに基礎づけられたものであつて、外部からは――シュピノーツァからすらも、――單にこれを明瞭ならしめる爲の手段を受取つたに過ぎなかつた。小兒の時代から、想像のこの天才は、世界を詩的に眺めたのである。岩石にも、流れ下る水にも、植物にも、彼は生命を感じたのであつて、一切の運動と形態とは、彼にはこの生命の發現に外ならなかつた。彼がその最初の詩を書く以前に、既に一つの詩的世界が彼を圍繞して居た。そして少年ゲエテが無數の紙片に、彼の詩を書きつけた時に、この世界は生長した。自然に對する生命賦與と、自然の獨自的な見方と、世界のうちに活動する各々の力の模感とに就てのいかなる魅力が、ライプツィヒ時代の彼の詩歌に存するぞらうか！　つゞいて彼が啓蒙期の文學の領域から歩み出で、全なるものの一箇の生命が彼の心にあらはれて來た時、これまで、詩的に見られたる自然のたゞ中に跋扈してゐた優艶文學の牧人の衣裳と神々とは消え失せた。そして今や自然の關聯が、明澄・純正・完全にあらはれ出でた。この關聯は、最も强く動かされたる情緒の變化し行く諸々の狀態に於て、常に新しくあり、しかも常に同一のものであつた。

然しゲエテの世界觀は、人間世界に對する彼の詩的理解によつてなほ深く規定された。生の囚はれざる解釋でもつて、生そのものから出發したる精神にとつては、かゝる詩的理解は自然的であり又必然的でもあつた。そして主としてこの點に、すべての時代に對するこの理解の作用が存するのである。自らの生涯を靜觀的に回顧するもの

は、それの最重要なる諸種の出來事に於て、自己の力の、自己の生の悦びの、又自己の特性の價値の進展が、或は進捗せられ、或は阻止されるのを見る。まさにこの點に於て、彼は自らの生の經過の個々の瞬間が有する意味を捕捉するのである。これが自己の生涯の自然的な見方である。この見方は生活の詩的描寫の根底をなすものである。而して何人と雖もゲエテより、より純粋に、人生の價値についての形而上學的或は宗教的前提の混入なしに、この見解を貫徹したものはなかつた。いづれの個性も彼には因果關聯による自己價値の實現だと思はれた。シャフツベーリとヘルデルとは、この觀察方法に於て、ゲエテを强化した。今や彼が全くこの見方のうちに生きた時に、この見方は無意識的に、また欲することなくして、彼の自然の體驗の上に影響した。それは自然の關聯に就ての彼の經驗のいづれにもあらはれた。夫故に自然は、ゲエテにとつては、そこに內在する力と意義との因果關聯に於ける實現だと思はれた。或意味深きものが、自然の裡で働らき、そして自然のうちに十分に現はれるのである。「自然の核子は人間の心情のうちに存しては居ないだらうか?」

かくして彼は少壯時代から汎神論に心の惹かれる事を見出した。『ヴェールテル』、『プロメートイス』、『ファウスト』は、「自然の內面的な・灼熱する神聖なる生命」を宣べ、千七百八十二年の自然に關する論文はそれは如何やうにして成立したるにもせよ、シャフツベーリとヘルデルとゲエテとの三者が結合せる世界觀を述べて居る。自然はそれに內在する神的の力によつて靈化されて居るのである。自然は一個であり、そして到るところで同質である。それは自らに獨特なる技術によつて、最完全なる藝術家として働くのである。かくして今や新しい汎神論の信條があらはれて來る！「自然は自らを享受せんがために分岐した。それは自己を傳ふべく倦むことなくして、常に新しい享受者を生長せしめる」（ゲエテの短文『自然について』の斷片』より。——譯者註）。千七百八十四年より八十五年にかけての冬、彼がシュピノーツァを讀んだ際に書きたる・この偉大なる思索家についての論文は、同一立脚地を占めて居る。存在と力と完全とは畢竟同一である。これぞ世界

背定の哲理であつて、中世期の世界蔑視に對立してジォルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno 1540—1600 云ふまでもなく、伊太利文藝復興期の哲學者、神を能動的自然、宇宙を被動的自然と解し、神の生命は全世界を貫き、一切の矛盾は神に於て一致すと考へた、後羅馬にて焚殺さる。——譯者註）が之を樹立し、シュピノーツァがこれを鋭い諸概念に於て組織立てたりしものである。

しかしゲェテはこれらの思索家たちの抽象的な推理手續を要しなかつた。彼は自然に對して直觀・思惟的な態度を取つた。たゞ思惟が知覺によつて支持されてゐる限りに於てのみ、彼は思惟に對してその妥當性を容認したのである。されば彼は、この探究し得べきものと或探究し得べからざるものとを、互に區別しなければならなかつた。そしてこの事は既にシュピノーツァ論に於て行はれたのであつた。ゲェテに從へば、無限の力そのものは、制限されたる人間精神の把握能力の及ぶところではない。彼はたゞこの力の直觀的な形成物へのみ、彼の探究を向けたのである。

既に學生時代より眼によりて働き・そして可視的なるものへ向けられたる彼の想像は、——「見る爲に生れ、觀照するように指定されたる」彼の想像は、——自然科學的研究へと彼を導いたのであつた。自然の概念は既に彼の世界觀によつて確定されてゐたのであるが、こゝで彼に自然の技法（テヒニク）に對する瞥見が開かれたのである。この技法は、不斷と漸增と兩極性との構成法則を以て働くのである。この技法は、典型的の自然形式を產出し、またこれを展開させる。彼の精神のうちに、これらの自然原則の不斷に現存する事より、彼の有名なる生物學的諸發見が生じたのである。勿論ゲェテは世界に內在する神的の力からして、進み行く展開裡に自然形式が生れる事は認めては居たけれど、彼の本來的な興味は、直觀の達し得るものに附着して居た。卽ち自然が自らの內實を分置する典型的な諸形式と、これらの典型がよつて以て自己を實現するところの諸法則とに附き纏つて居た。かくして彼は對象的思惟によつて、全宇宙の意味に關する洞察に到達した。何となれば、この意味は生の構成形式のうちに示されてゐるからである。されば彼にとつては、自然には何等の內面もなければ、外面もなく、出

來事の生起と生起の意味との分離もなく、自然と精神との差別もない。全且一なるものこそは、――「增强されたる諸形態を、滔々と流るる如く生み出す一つの海洋」である。

自然のこの見解は、一つの大きなる概觀――これを後年シェリングが追究したのである――に於て、ゲェテに造形美術の本質を闡明した。想像は造形美術に於て、自然の諸形式中に存する典型的なるものを、純なる描現に齎らすのである。されば造形美術は、自然の無意識的な創造を、意識の範圍內で繼續するのである。同時にこゝで彼には、或認識の可能性に就いての謎が解決された。この謎は當時限りなき討論に於て、哲學者たちを勞したものであつた。一個の全體として諸部分のうちに十分にあらはれる自然の活動は、全體が諸部分に對する關係に於て進み行く直觀的思惟の方法と同一である。この關係の及び得る限り、理解はその對象と同一である、

されば宇宙の統一といふ感じによつて、到るところで支持されて居たゲェテの直觀

的思惟は、有機的自然科學に於ては生產力と發見力とに極めて富めるものとして證明されたけれど、數學的自然科學に至つては、それが彼には全然異種的であり、又彼の近づき難いものでなければならなかつた。この種の科學に於ては、悟性は諸現象の直觀的なるものを溶解し、いかなる直接經驗の範圍內にも落ち來らざる或對象的のものに就て、數學的諸關係を建成する。機械的自然科學を憎惡しこれに打克たんと努めたが、しかも此科學の小休みなき進步を阻止し得なかつたことは、ゲェテの歷史的な運命であつた。されば彼の色彩論の物理學的の部分は支持し難いものであるにしても、ヨハネス・ミュラー（Johannes Peter Müller 1801―1858 生理學者。解剖學、動物學、古生物學等に通じてゐた。――譯者註）によつての生理學的光學の建設は、實に彼の色彩論の生理學的部分から出發したのであつた。ゲェテ自身は、――眼のこの天才は、――光と色との諸現象を、彼の光學上の實驗に於て享樂した。彼は信仰深きものが、神的實在と交通する如く、此岸世界のこの最も純なる要素と交通したのであつた。かくして彼は科學の色彩なき抽象諸概念に對

して直觀力の權利と世界の詩的な美とを斷乎として主張した。

精神世界と、そのうちに於ける人間の行爲とは、ゲエテにとつては、人間的組織の內部として、自然より分離し難きものであつた。然し此方面では、感覺的直觀は、最早彼を導くことは出來ない。精神世界の關聯のなかへ進入すべき試みとして、彼を圍繞したるいづれのものも——卽ち實用心理學も、ヘーゲルの體系學も新しい歷史學も、——彼には利用されなかつた。彼は人間と事物とを、自らの上に働きかけしめ、行動しつゝ、自己と世界とに就て自らを敎へたのであつた。たゞ彼がこれをなした態度の純正・無偏見・普遍性といふ事のうちにのみ、彼の見解の客觀性は、その基礎を持つて居た。かくして個性的につくられた諸人格の多樣性が、彼の心に映じたのである。この諸人格を貫いて、人間的存在のいろいろな自然形式が伸長するのである。卽ち兩性、年齡、特性の諸典型、發展と廢頹との諸形式などがこれである。同じくまた社會は、身分により、職業により、政治上の業務によつて分れて居て、多種多樣なる生活狀態をなして擴がつて居る。彼は到るところで、不變的なるもの、必然的なるものを見る。かくして精神世界の關聯が、それに基礎を置くところの偉大なる諸關係が現はれて來る。自然はわれらのうちに、諸種の力の豐富と諸和とを置いた。これらの力は、降つては本能に至るまで、それ自らの價値を有し、各の個性のうちに或特殊の構成を持つて居る。「(それは)汝を世に出したる法則によりてである。汝はさうでないわけには行かない。汝は汝自身より逃れ出すわけには行かない」(ゲエテの詩『原始の言葉』より取れるもの。——譯者註) この基礎の上で、人間は一貫せる小休みなき行爲に於て、自らの人格を形成することが出來るのである。人格は世界最高の自己價値である。「民衆も奴隸も、征服者も、彼等はいつでも承認する。人間最高の幸福は、たゞ人格のみである事を。」(ゲエテの『西東詩篇』中にある。——譯者註) そして一切の社會秩序は、諸々の人格を、自由にしてまた全體の幸福に適應する活動の裡に置くべき任務を持つ。されば『ヴィルヘルム・マイスターの遍歷時代』の代議制的社會主義は、自由組合に於て、近代產業生活の不斷の動搖性に向つて、之を固定させ

る一關聯を與ふべき手段を發見して居る。然し人間は、諸種の力のこの活動に於て、行爲のたゞ中にありつゝも、彼の活動が編み込まれてゐるところの全一的關聯に獻身することによりて、內面から安定と靜謐とに達するのである。これを要約すると、首尾一貫せる快活なる行爲のうちに、人生のかく觀照されたる意味のうちに、人間の任務は存するのである。

然しながら或關聯に就いてのこれらの輕い示唆すらも、ゲエテの處世觀が、それら(の示唆)に於て、明瞭となるのにはあまりに抽象的であり、あまりに粗雜であり、且餘りに空疎である。この人生觀の輕い漂へる諸精神を、概念裡に齎らし、或は進んで體系のうちに運び込まうとするいづれの試も、これらの精神から顏光と光明とを奪ひ去るもので、それはたゞ悲しい影を殘すだけである。敎へはこゝでは、これを生み出す過程より分離されることは出來ず、生への指令は、これを述ぶる人より分けられることは出來ない。個々の生活關係に於ける意味の多樣さは、——ゲエテの眼前に、生

そのものの如く、種々樣々に而して無限に色調づけられて現はれたるこの多樣さは、——ゲエテの透視者的特性の關知するところで、彼の叡智である。この叡智は、道德や美的態度の彼岸に存在する。何となれば道德は、生の課題の全體より一つの目標と、それの實現がわれらの價値を構成すべき一つの規範とを分離するからである。また美的態度は生の深い意義を理解することを前提とする。夫の叡智は一つの生活技術ではあるが、然しまたそれ以上である。この叡智より、快活なる行爲への名狀し難き力と、現世的存在の意義の肯定及生そのものよりの生の理解とが湧き出づる。彼はこの敎へを、ミニヨオンやオティーリエの墓場のほとりに於ても、白日の明るい光の裡に於ても、同樣に獲得したのであつた。

探究し得べきものより、いくつかの線が、探究し得ざるものへと走入する。何となればゲエテの精神のうちに於ては、何物も凝化して居らず、切り離されて居ないからである。人間は自らの生の課題を、究極的な事物に就ての或直觀に關係させるものであ

るが、この直觀に於て彼は生の課題の實現を保證されて居るのである。こゝに宗教の源泉があり、究極的な事物に就ての各種の信仰の根源がある。明瞭なる一線が、凡べての經驗し得べきものを超脱せるこの信仰を、生の解釋や人間の任務の確立などから分離する。この信仰は、それの起源に於て、またそれの效力性に於て主觀的であり相對的であつて、われらの年齢と共に變化する。加之それは同一時にありても、また同一人物にありても、それの現はれ出づる心魂の部位によつて異なるものである。ゲエテは自らが藝術家としては汎神論者であり、自然研究者としては多神論者であり、道義人としては一つの神的人格に對する信仰に傾いて居る事を發見した。われらは然し「老年期に於ては神秘家となる」が故に、彼は終にわれらの要求と萬有との間の一致に關する樂天的期待によつて、上から來る人間生活の指導と、心靈の圓滿實現と、並に小休なく活動する人々の不死とについての信條のうちに、悠々自適するに至つたのである。

ゲエテは今日われらに取つては、生そのものからなす生の理解と、生の欣ばしき肯定とを意味する。ゲエテは生に於て生の意味と價値とを追つて行つたやうに、世界に於てもまたさうであつた。彼は各の事件、各の事實を、この調和的なる全體に對する關係に於て取るのである。彼の詩は、われらの世界と調和させ、世界を光明で滿すのである。世界の價値に充ちた而して意味深長なる關聯に對する動かし難き・そして彼を幸福ならしむる信仰は、家長的の悠揚さと諧謔とを有する彼の記錄されたる『對話』(Gespräche mit Goethe 秘書エケルマンの錄した『ゲエテとの對話』を指す。——譯者註)の中でわれらを迎へる。それは往々ルテルの食卓演說を思ひ起さしめるものがある。彼の世界觀のこの中心點から、彼は四方八方に擴がつて行く。潑溂として彼の前に立てる全體のもとに、ますます多くの事實を從屬させようとする彼の要求は、彼の老ゆるに從つて愈々强くなつたのである。この巨大なる直觀的能力は、世界に於けるあらゆる事實を、自己の觀察の下に置くべく、この世に生れ來つたやうに見えた。そして彼の死は單に、かく依然として進行し續けるように企てられた作業の、自然によつて命ぜられたる停止に過ぎないのである。彼

の眼光は到るところで清澄であり、眞實であり、また純粹である。この點に於ても、ゲエテと彼に先行せる十八世紀の歐洲精神の最大なる支配者ヴォルテールとの間には、何たる區別があるであらうか！ 自然を理解すべく今日はニュートンをわがものとし、歴史を改革すべく明日はボーリングブローク（Viscount Henry Saint John Bolingbroke 1678—1751 英國の政治家。後年政治に失脚してからは、專ら文筆に從事した。『歴史研究に就ての書翰』（千七百五十一年）その他の著がある。——譯者註）を手にしたるこの驚くべき人物（即ちヴォルテール）は自らの周圍に於ける各々の動きを覺知し、また之を利用すべく、あらゆる方面を眺めたやうに見えるが、——彼はいつも別人であつて、彼自身ならざるプロテイス（千變萬化の人、多方面の人の義。——譯者註）であつた。何となれば、彼はいつも彼自身よりは、より以上の或ものにより、彼よりもより深く眺め、より高貴により品よく考へる或ものによりて、巧に自らを隱蔽することを知つて居た。自分自身と談るヴォルテールは、彼の歐洲の公衆に談るヴォルテールとは別人であつたのである。之に反してゲエテが嘗つて案出し又思惟したる一切のものからは、いつも同一の至純にしてまた探究し難き程に深遠なる詩人の眼が、われらを眺めるのである。彼は彼の最祕密な思想に於ても、『イフィゲーニエ』のうちで語るのと同一人物である。生に就ての彼の經驗して行く思惟、彼の科學、彼の詩作は、それらが敎ふるところのものに於て一致して居る。個性の全方面的展開と存在の自然的にして快活なる把握とを可能ならしめたる簡單な境遇が、彼をなほ圍繞して居たのである。

五

經驗することのうちに活動する思惟のこの關聯は、ゲエテの詩作の基礎である。この關聯は、詩作の詩的動因の成立、詩作の結構、諸人物の形成及びその內的形式を決定する。ゲエテの詩の展開は、實にこの關聯に基づくのである。

體驗せる現實を詩的のものに高めるのは、彼の想像の不斷の方向であらねばならな

かつた。彼の對話はその青春時代に於ては、種々の譬喩に充ちて居た。彼は「人生に起れる若干の重要性ある事物」を戯曲化した。彼は自らの體驗の爲に、世界史的象徴を從へ、或は體驗を歴史上の及び同時代の出來事に搬入したのであるが、これは實に體驗の絶えざる具體化といふ事柄の增强に外ならなかつたのである。かくして彼の個人的運命と彼の周圍の大なる諸種の動きとの結合に於て、『プロメートイス』や『ファウスト』や『ヴェールテル』『ヴィルヘルム・マイスター』『イフィゲーニエ』乃至『タソー』等の極めて效果的なモティーフが成立したのである。これによつて今や、彼の詩作の內的形式が制約されてあつた。出來事の硬い・角張つた素材は、想像の形成過程に於て全く溶解され・淨化されて居る。この過程は、體驗とその意味との簡素なる表現の爲に必要なるものより以外には、何ものをも殘して置かないのである。この過程は、結構中に於ける一切の單なる事實的のものと、諸性格の構成に於けるすべての偶然的なるものとを喰ひつくすのである。かくして今やわれらの前に立つものは、或

意義深く・精神に充ちたものの簡單なる具體化である。彼の詩作は、――新しいティターン（主神ツウイスに反抗して滅ぼされたる巨人族の名。――譯者註）的の反逆より、自然への新しい・親密なる感情移入に至るまで、――時代意識の深所から、精神的諸過程の或新しい世界を引き出すのである。ゲエテは激情の恐ろしい現象をではなくして、全き人間を、その周圍の永遠なる諸力とこの人間との關係に於て、また生と人間とに就てのこのもの（人間）の祕やかなる惱みに於て描寫する最初の近代詩人であり、この點では凡べての近代人たちは彼の門弟である。そして彼の想像の强力なる特質は、人間と事物とに或明瞭さを與へはするが、それはうるさい現實性を少しも有するものではなくて、――遙けき理想世界に極めて明瞭なる存在を有するものである。彼の無比なる言語天才は、表現の素朴なる力と共に、フランケン地方の彼の鄕土に根ざしつゝ、限りなき推敲と或美的時代の文學と、過去の復活せる偉大なる詩とによつて培はれたのであるが、この天才が魂のこれらの動きの一切の色階（ニュアンス）を描寫すべき手段を彼に授けたのであつた。これにはまた今や

極めて獨自的な種類の或便益が參加した。それは造形美術に於ける不斷の種々なる實習と造形美術の諸作品に極めて密接に親炙したことである。幼時から彼は「對象の外觀を精密に觀察しよう」と努めたのである。「眼はとりわけ、私が世界を把へる器官であつた」。彼は畫家たちの間に生活した。そしてまだ半ば小兒のとき、彼は「彼の眺めやるところに一個の繪畫を眺めた」のであつた。（家庭所藏などの）やゝ舊い繪畫が人生の種々の場面を、繪畫的に見るように彼を刺戟した。――「繪畫的」とは、造形美術の諸法則に從つて、外界を、それに特有なる效果へと改造する謂であつた。この點に於て彼の最偉大なる近代的先輩は、セルヴァンテスその人であつたが、彼は伊太利に於ても、彼の故郷に於ても、偉大なる繪畫の影響を受けたに相違ない。『ファウスト』第一部の庭園の場面から『ヘルマンとドロテーア』に至り、またファウストの聖化に至るまで、この天成の而してまた鍛え上げられたる能力は、全外界を美へと高めるのである。そしてまた一切の心的なるものが、如何に美へと高められてゐるであらうか！　各の生あるものに對する彼の欣々たる關心と、彼の深い理解と、並に彼の人間的寛容とは、各の存在をそれの內的價値に於て現はれしむると同時に、またそれの定められたる限界のうちに現はれしめた。かくて描寫と組成と樣式との彼の藝術が、最終の美を、この外界及內界の上に擴げるのである。この藝術は各の作品にそれの適當なる形式を與へ、往々にしてまた『ファウスト』や『ヴィルヘルム・マイスター』や『ヘルマンとドロテーア』に於けるやうに、全然新しい形式をも賦與する。彼の藝術に於ては、彼自身の本質に於ける如く、個々の變らざる狀態內に靜止することが、全體の進歩と結合して居る。この想像の本性は、對象を運動に、凝結せる性格描寫を內面的の活潑さに溶解することに就てのレシングの規則と範例とに一致する。かゝる溶解によつて、新しい諸狀況は諸人物を新しく見えしむるのである。彼は心的生活の統一を、固定せる諸性質のうちに現はれしめないで、彼等の生活の諸契機を――云はゞ彼等の生存のメロディーに結びつける內的法則のうちに示すのである。ゲエテはラファ

エルが美の畫家であり、モーツァルトが美の音樂家であるやうに、美の詩人である。

ゲエテの詩人的展開は、植物の生長の如くである。彼は自らと質を同じくするものを大地より取り、彼の本質の法則に從つてこれを同化する。そして生の四季が彼を越えて流れて行つた。彼の最初の青年期の詩（ポエヂイー）は、彼の時代の形式のうちに自由に動いて居た。然し彼の牧人劇『同罪者』(Die Mitschüldigen) や、彼の萊府（ライプツイヒ）時代の輕い嬉遊的な歌謠の材料は、既に全く彼の經驗のうちに存したのである。そしてこれらの種類のいづれに於ても、既に獨逸の彼の諸先輩を凌駕して居る。シュトラースブルヒ時代から、最初のヴァイマール時代に至るまでの第二期は、第一期と明白なる對照をなして居る。ゲエテは今や、偉大なるものへと進む新しき時代の人々の漠然たる努力に、最高の表現を與へたのである。彼はシェークスピアやコルネイユの作にあらはれる王者や臣僚たちを後（しりへ）にした。十八世紀に自己の價値を悟知するやうになつた天才者が彼の對象となつた。即ちそれは、創造的藝術家たるプロメートイス（希臘神話の英雄、土をこねつて人間をつくり、火を天上より盜み來つて人類に與へたと云はれる。ト譯者註）、宗教的天才たるモハメト、智識と權力と享樂とに對する無限の努力を有するファウスト、または感情生活の極端なる强さが現實に對立して、寂しく蝕ばまれ行くヴェールテルなどがそれであつた。この新しい詩的世界は、生の極めて强烈なるまた最意味深い諸契機を摘出し、そしてこれらを結び合せたる一種獨特なる樣式で云ひあらはされて居る。（ゲエテの）この非常に豐富な天性のうちには、發展のいかなる可能性が存在したかを、何人が云ひ得よう？　ヴァイマールに居る事に決定してしまつた時、この地で彼の詩作の一新時代が漸次に開始された。それの初めは男性的活動への過渡期に於てあらはれたる偉大なる生の經驗であつた。一切を包括したがり、又與へられたる境涯の制柵から脫け出ようと努力する活動は、氣分の小休みなき變化と不適當と云ふ感じとを喚び起した。かくして生の衝動の種々なる當て違ひから、極めて深い人間的體驗が成立した。この體驗に依れば、意識せる自己制限に於ける・絕えざる・純眞なる・そして首尾一貫せる活動だけが、魂の內面的な持續的なる

自由を招來し得るのである。ゲエテはこの事を、當時のいかなる人よりも、より強く、より意識的に、より無前提的に經驗したが故に、ひそやかな內面的經過を有する魂の歷史への瞥見が、彼に開かれたのであつた。それはラファーテルの如く、基督敎によつて制限されたる魂の歷史でもなければ、ヴィーランドの如く、佛蘭西の時代精神によつて決定されたる淺薄なるそれ（魂の歷史）でもなかつた。（ゲエテにあつては）それは、純然たる生の經驗から湧き出しただけに、一個の典型的な特性を持つて居た。この魂の歷史こそは、彼の詩的物語なる『祕密』(Geheimnisse 千七百八十四年に初められたけれど、完成に終つた敍事詩、今五十一ストローフェ殘つてゐる。——譯者註)の對象たるべき筈であつた。この詩では、各の旣成信仰は、內的體驗の象徵（シムボル）に過ぎないと云ふ理念でもつて、レシングやヘルデルの宗敎心が、それの最後の完成に到達するのである。而してレシングの『ナータン』の中心に立つてゐるのと同じ體驗が、こゝでは聖賢者フマーヌスに於て行はれる。

そは凡べての力、遠方（をちかた）へと逼り進むが故なり、
こゝかしこに活き、また働くべく。
されど世界の流は、すべての側より
狹め阻み——そしてわれらを拉して行く。
この內なる嵐と、外（そと）なる爭との中に、
心は解（げ）しがたき言葉を聞く。
「萬有を束縛する力より、
自らに打克つ人ぞ、自らを解き放つなれ。」

『イフィゲーニエ』は同じ經驗に基づくもので、それは自己自身を制御することが、救濟する力を、純なる魂に與へることの敍述である。諦念はかくして全體のための活動への途を開くのである。諦念の作り出すものは、堅固と純潔と寬容と愛と並に靜寂とである。それは不定なる努力に限界を與へる。かくして生ずる絕えざる一貫的なる行爲のうちに、今やゲエテはその壯年時代に於て、生の價値を益々多く置いたのであつた。行政方面に於ける彼の活動、カントとフィヒテの哲學、然し特にシラーとその

偉大なる生涯とは、これに影響を及ぼした。――シラーの生活にあつては、當時の政治的窘窮が、彼に他の活動を拒否したので、詩作が行爲になつたのである。――更にこれに加へて、革命によつて、凡べて現存するものの受ける脅威がまた、魂と愛と美との詩人をも行爲の世界へと指示したのである。さればゲエテも、シラーと同じく、一切の享樂、一切の智識、一切の內的なるものに於て、たゞ全體の爲にする活動の準備のみを認めたのである。そしてこれはまた獨逸國民の歩みに對して模範的であつた。『ファウスト』も『ヴィルヘルム・マイスター』も、行爲の世界に入り込む事によつて、それの結末を受け取つたのである。『ヴィルヘルム・マイスター』に於ては、ゲエテはこれらの典型的な諸階段に於ける一つの發展史を敍して居る。ファウストの脊質は、諦念の制限がこゝでは後退することを要求した。その最後（死）すらも、自己の制限の意識を齎らし來らざるこの存在（ファウスト）は、別種の典型的な諸階段を經由する。しかしこの作では、全體の爲にする行爲が、生の最高價値だとして、他のいかなる箇

所に於けるよりも、より強烈に提示されて居る。

この兩作（『ヴィルヘルム・マイスター』と『ファウスト』）は、生を或階段的序列をなして、或理想を實現して行く展開の過程として描寫して居る。これらの作は人生より、或特殊な側面とか、或限られたる時代とかを取り出すのではなくして、凡べての人間を包攝しようとする。これこそ限りなき・そして決して全く解決され得ざる課題ではないか！　ゲエテがこれらの作に於て、極めて個性的なる事を、われらの存在の最高諸關係と結びつけ、且つ世俗事象を飾りなき生の喜悅を以て、同時にまた圓熟したる皮肉な觀察を以て、魂の深處の事象と對立させた時、歐洲の文藝はこの兩作に於て、一つのより高い階段に登つたのである。新しい驚くべき詩的印象手段が獲得された。そしてこれらの作から極めて強い影響が全國民に及び、『ファウスト』からは加之世界文學にまでその影響が及んだ。次いでゲエテは今一度その自敍傳に於て、諸々の素質と――これらの素質を彼はたゞそれの現はれに於てのみ明かにしたのであるが、――これに對する外界の諸

影響とから生ずる或發達（の過程）を描かうと企てたのである。

『ファウスト』と『ヴィルヘルム・マイスター』とは、ゲエテの全生涯を通じて彼に伴隨した。然して生そのものの如く、未完成に止まつた。藝術家ゲエテは、それらのうちに完全なる美を具現するため、劃限されたる材料を要したのである。そしてゲエテの體驗は甚廣汎であり、彼の情緒は甚動き易かつたので、彼は彼以前のいかなる詩人ともちがつて、互に全く相容れないやうに見える彼の生活の諸情調や心的現實の種々なる側面を、それの孤立せる意味に於て、獨自の諸世界となしたのである。――例へば『羅馬哀歌』の露骨なる愛の喜悅、美の充實、『バンドーラ』『激情三部曲』の心的の深み、『西東詩集』の靜觀性の如きがそれである。

ゲエテの詩人的展開の上で、其れより以後の諸時代を劃することは、不可能であらう。この展開が進み行くにつれて、これを規定したる諸般の出來事の諸系列は、互にますます錯綜し、またこれらの系列の各々は、相異なる時期に初まるのである。有機

世界の構成法則の研究は、ゲエテの自然の詩的描寫に單純化を將來した。かくしてこの種の描寫の獨特なる詩的形式と彼の教訓詩とが生じたのである。次いで彼は、かゝる構成法則と持續的形式とを、人間生活のうちに覓めた事によつて、諸現象の雜多なる集合が、彼にはこゝでゝ人間とその境遇と社會との種々な根本類型の下に整列することとなつた。これと關聯して、類型を作り出す希臘藝術が、彼の精神に及ぼす力は增大した。これぞ生の眞實を、美に淨化する一つの客觀的詩作の前提であつた。ゲエテは始めて、意識して詩を客觀的な世界理解の機關に高めたのである。ゲエテの精神は、自然に對する彼の間斷なき科學的研究によつて大に淨化され、自然の作用と能く合致したので、『ヘルマンとドロテーア』に於ては、彼は法則的なるものを、非意圖的なる創作で示すことが出來、しかもこの法則的なるものが、同時に單に一度だけ、又唯一つだけ、個性的に存在する諸々の人物や運命を通して、ほの見えるやうに示し得たのである。客觀的の詩は、當時の考へから見ると、ホメールに自然の贈物として

その手に歸したのであつたが、ゲエテは現實の科學的理解を基礎として、之を實現したのであつた。蓋しこの科學的理解は、われ知らずに、省察を用ひないで、事物を純粹に見るようにゲエテを淨化したからである。リオナルド（ダ・ヴィンチのこと）とデューラー（Albrecht Dürer 1471—1528 獨逸の畫家、北方繪畫に於けるルネサンスの巨匠。——譯者註）とは、ゲエテ以前に同じ事を、彼等の領域に於て成し遂げたのであつた。——この方面では、彼等は人間形態のあらゆる將來のより高い描寫の模本であつた。さて佛蘭西革命の巨大な現象が、獨逸の生活に漸次に近づいた時、ゲエテは、一個の大なる三部曲を以て、——この三部曲のうち、第一部卽ち『庶出の娘』のみが完成された、——佛蘭西の社會組織を代表的なるいくたりかの人物によりて提示し、またこの社會の沒落を招來しなければならなかつた社會的諸要因を、そのうちに示さんが爲に、同樣なる典型的形式を利用したのであつた。彼の精神內では、觀察が漸次に重きをなして來た。『親和力』に於ては、結婚問題の殆んど理論的な取扱ひと、極めて深き心情的參與との結合が、均齊的な秩序と、典型的な諸性格の均衡を得た釣合とに於て、——これは正しく音樂的效果をなすものである、——描き出されて居るが、それは不思議なる魅力を以て、われらを動かすのである。彼は典型的の描寫から象徵的のそれへとはまつて行つた。蓋し感情的活力を有する契機が、長い記憶の關聯に於て、老いたるゲエテから消失した故である。生そのものが云ひあらはされなければならぬ。そしてこの事はたゞ象徵的描寫に於てのみ可能である。彼の敍情詩に於ては、今や契機は過去の事柄によつて充され且つ飽和されて居る如くであつた。彼に迫り來るかやうな充實を滿足せしめ得るものは、誇大的な表現のみである。また落着いた靜觀的態度が漸次に强く彼を襲ひ來つたが、これ（譯觀的態度）に對しては、彼の注意深く跡づけ來つた世界文學が、今や『西東詩集』に於て、彼に新らしい形成を提供した。彼の創作は、哲學的の詩や箴言に於ける彼の處世叡智の最終の表現を以て、——生の不諧調と諧調とを隱微の裡に統合し、そして山々が暮れて行く夕闇のうちにあらはれるやうに、事物をより力强く、より嚴肅にまたより莊重に見

えしむる老者の崇高なる樣式を以て、――『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』の如き完成し得ざるものを、後世のために完成しようとする老齢者の・人を感動せしむる最後の奮闘を以て、――終つたのである。

六

ゲエテの詩作の母壤は敍情詩である。

内面性の詩形たる敍情詩は、音樂と相並んで、獨逸國民の最獨自的なる領域である。感情と慾求と意慾とを表現すべき文章法上の手段のいかなる多樣性が、内面生活の色階に對する言葉のいかなる豐贍が、獨逸語に特有であるであらうか！ この内面性とそれの言語的表現手段とは、徐々に發達して來て、敍情詩のうちに現はれた。十六七世紀の獨逸人の内面には、神性のうちに基礎を置かれた諸秩序による拘束が支配して居た。プロテスタントの宗教心は、この拘束を意識の統一的な深所へと立ち歸らせた。この時代のすぐれたる人々の沈着で且つ纏まつた性格は、これから生ずるのである。この性格は續いて十七世紀に於ける俗界的科學的文化に於て、新しい種類の堅牢化を受取つた。さればこの性格は、パウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607―1676 獨逸の最もすぐれたる宗教的敍事詩人の一人で、多くの讃美歌を作つた。――譯者註）や、グリフィウス（Andreas Gryphius 1614―1664 レシング以前のすぐれたる戲曲詩人、また十四行詩の秀作がある。――譯者註）や、フレーミング（Paul Fleming 1600―1640 オーピッツ派の詩人 で、天賦豊かなる而して極めて個性的な敍情詩人である。――譯者註）らの敍情詩に現はれて居る。生の變替は彼等の本質の種々なる側面を言ひ現はす。然しかやうにして自らを述ぶる人間そのものは、宗教的・形而上學的・道德的に同一の確定せる量である。この束縛は徐々に解けて來た。獨逸の敍情詩は啓蒙時代の、クロプシュトクの、また之に次ぐ時代の、敍情詩上の春の樣式狀態を急いで通過する。これらの變化のうちにゲエテは進展した。宗教的・道德的束縛として、悟性として、又歡喜を欲求しながらもこれに自らを委ぬることを恐るゝ宗

敎心として、最後には新しい自由と傳統的のものとの未熟なる結合として現はれた堅固なるもの・緊密なるもの・溶け難きものは、ゲエテに於て初めて溶解したのである。彼の魂のうちには、外界のいづれの印象に對しても、特殊の音響的形像を以て答ふる音樂的な活力が存する。彼の精神生活は、極めて純なる氣分を有し、迅速で動き易く且つ敏感なので、それは外界に對する關係を、その全範圍に亘り、且つ全く客觀的に表現するやうに見える。彼の詩のいづれもが、一個の獨自的な魂を有し、この魂は形式に於て、只一度のみかく現はれて再び消えて仕舞ふ或大氣的なる身體を創造した。彼は彼の心の運動の法則性に、極めて簡單な・そして極めて廣汎なる表現を與へる。種々の年齢はいづれも生を、一個獨特なる言語でもつて、また心の運動を示すその（言語の）特殊なリズムでもつて談つて居る。典型的なる諸々の生活狀態は、こゝで初めてそれの全價値に於て感ぜられたやうに見える。そして各々の詩は、或一定の精神狀態に於て體驗せられるだけの自然の諸特質を告知するに過ぎないのではあるが、それでも以前には何人も、自然とかやうな心からの親善關係に於て生活した事はなかつたかの如くに思はれるのである。

この敎情詩は、ゲエテの詩作全體を貫いて居る。まづ第一に彼の描ける人物らは、これまでの獨逸の詩作に於ける人間描寫の凝化狀態から救ひ出された如き觀がある。彼等は新しい自由と內的可動性とのうちに生活する。彼等に於て堅固なるものは、個人的存在に內在する展開の法則と經過の規則とのうちに存するのである。一切の實質的なるものは、生の旋律のうちに溶解されて居る。

そこで、この點から出發して、人間描寫のゲエテの藝術へ入り込むことが、今や問題となるのである。

或詩人が自己の人物らの構成の爲に、材料として人生から取るところのものを確定する事が、いつも最初の課題であるだらう。而して文學史はしばらく前から、この手續を極めて精妙に造り上げた。然し文學史は、この際に、勿論この手續の限界を必ず

しも常に意識して居たわけではなかつた。何となれば、或一人の人間の生活は、多くの他の人々の運命と奇しくもあざなはれて居て、この人々の運命は、或時は突然に明白なる力を以て彼に向つて歩み寄るけれど、その後は大抵またもや世界の混雑裡に紛れ込むか、或は彼により輕やかに――恐らくは或無關係なる人の言葉のうちでのみ、または事實を滿載せる或新聞紙の報知に於てのみ――觸れるのである。或はまたそれ（或一人の人間の生活）は、目睹せる或は物語で聞き又は讀める凡べてのかゝる體驗と編み合はされて居り、その大氣はかくして、種々の動因や諸々の性格や作り話などの胚種に充ち滿ちて居るので、われらに與へられたる材料から、或詩人の生活を、彼の想像の所產物との確實な關聯に齎らす事は、不可能であるかに思はれる。メフィストフェーレスやグレートヒェンや、『親和力』の動因などは、ゲエテ自身の生活の構築に對しては、殆んど何ものをも意味せざる・ふとしした人世の逢遭に於て、彼の心に閃めいたのかも知れない。これらのものは、ゲエテの想像を、形態構成の忍びやかな造形活動に

引き入れたる性質を、正しく持つて居たのであつた。

今一の課題は生の與へられた材料より、諸性格を作り上げ行く過程を規定する生活經驗の諸契機を提示することである。ゲエテは彼の作品の動因を、彼自身の內部から、彼の苦惱と葛藤とから掬み取つた。各々の描寫的なる詩的作品の、並に生そのものの、動因的發條たる葛藤は、彼にあつては人間自身の內部から生ずる。そしてヴァイマールに於ける生活轉回からこのかた、ゲエテに最も特徵的な事は、この葛藤の解決も、ほとんどすべての場合に、人間それ自らの內部に於て行はれることである。人間がその運命と共に、そこに置かれて居る自然の關聯への愛の深い眼差は、ゲエテに依れば、各人に生との融和を可能ならしめるものである。或は人間それ自らが盲目で、この融和を捉へることが出來ない場合にも、融和は詩人の心情のうちに在る。これぞ彼の詩に於けるテュルテーウス（Tyrtäus 希臘の紀元前七世紀の詩人、戰歌を作つた。こゝでは活氣を與へる又は活氣に充てる義か。――譯者註）的のもので、ゲエテは所謂「病院詩人たち」に對して好んでこれを自ら誇つたの

であつた。

この點に於て、人々はまたゲエテの詩作の限界を、――この限界なくんば、彼の詩作の驚異すべき力は存しないであらう、――理解してよろしい。或人々はゲエテを幸運の寵兒として稱讃し、また羨む。然るに他の人々は、彼の生涯中、ほんの僅少の日數だけしか彼は眞に幸福ではなかつたといふゲエテ自身の周知の言葉を援用する。又或人々は眞の苦惱に對して、彼がその詩作のうちでいかなる人情をも示して居ない事を非難する。然るに他の人々には、彼はあらゆる苦しみに對する同感者であると思はれるのである。ゲエテは自らの體驗せる、又自らが或深さに於て體驗したるいくつかの葛藤を詩作した。この深さについては、彼の書翰は、彼の詩作と同樣に能く物語つて居る。然しゲエテが、自分はイフィゲーニエをして、アポルダのいづれの靴下職人も空腹を感じない（いかなる人も餓えず の義。――譯者註）かのやうに話させようと思ふのだと云つたとき、その言葉のうちには、彼が自らの詩を、生存の爲の、又權力の爲の原始的なる鬪爭より、

及び社會に於ける諸々の意志相互間に於ける力鬪より湧き出でて來る人世のごく自然生的な苦痛から遮斷したのであると云ふ感じが存するのである。人間の內部に生じ、この內部に於て戰ひ拔かれ、そしてそのうちに終る諸々の葛藤は、人の體驗しまた詩作したものである。彼はそれ以外になすことは出來なかつた。彼は嘗つてから云つて自らを辯護した。「私は自分が生活しなかつたものを、決して詩作したことはなかつた」と。

彼の詩作方法の特質はこれと關聯する。沙翁は支配する諸動因や種々の情緒から、一個の人物とそれの行爲とを作り上げた。ゲエテは潑溂たる個々的部分を相並べて置く。想像は正に最偉大なる詩人たちに於てすら限られてゐる。一方（沙翁）の方法の危險は、人工的なもの（になる事）であり、標品又は機械に比較さるべきもの（になる）のであるが、他（ゲエテ）の方法の危險は支離滅裂（になる）といふ事に存する。一方の詩人（沙翁）の遺つた人物は、圓味を缺いて居て、往々にして筋と骨と腱とから成れるやうに見える。

他方の詩人（ゲエテ）の造つた人物は、溫柔なる生の眞實を有して居るが、彼等の內的狀態と、詩作の進行のためには、必要缺くべからざる行爲との間に、必ずしも常に、首肯すべき關聯が支配しては居ない。——たとへそこには、ルソーの諸人物が有する感情と行爲との間に於ける堪え難き不調和はないとしても。

『ヴェールテル』、『プロメートイス』、『マホメト』及び『ファウスト』はその外形によりてもまた、上殺の方法で——それは主として最廣義に於ける敍情詩的の諸契機からではあるが——組み立てられてゐる。それらは動作の關聯ある誘導を缺いて居るけれど、その代りに內面生活を印象派的の强さで示して居る。『ファウスト』はこの藝術形式の頂點である。ゲエテが極めて忽卒に書きつけた紙片や、彼の敍情詩のうちには、諸種の狀態を、それの事實的な背景と共に、極めて溫柔に表現し、これを諸々の形像に於て直觀的に示す驚くべき彼の能力があらはれて居る。『ファウスト』に於ては、一切の最深い體驗を、美しい扮裝で云ひあらはすことを許す或動作の偉大なる比喩をもつて、ゲエテは自己を動かしたものを描寫した。純情無垢なること、自然そのものの如くに、彼はこのすべてを提示して居る。未だ嘗つて何人も、ゲエテほどに眞實ではなかつた。この自己描寫のうちに眺められて、ゲエテは彼の時代の具體化されたる理想となつた。そして『ファウスト』は、ゲエテが自己の全生活を現はし示す廣汎なるシムボル（象徵）である。『タソー』と『イフィゲーニエ』とに於ては、彼はまた心的戲曲の別な全然新らしい一形式を創造した。この形式は、『兄弟姉妹（ゲシュヴィスター）』や『シュテラ』に於て既に準備されて居たものである。こゝでは魂は魂の上に作用する。外界に起るものは、衣服であり、外被であるに過ぎない。一つの內的過程は、われらがほとんど刻一刻とこれを跡づける事が出來る位に連續して描かれて居る。この過程は僅少な人々の間を、短時間にまた場所をひどく變更することなくして走過して居る。各々の劇場的な光彩や、すべての外面的な戲曲術は、全關心を內的生活の上に集中せんが爲に疎んぜられて居る。

ゲエテ

さればゲエテの諸々の詩作は、それらのうちにありてわれらと語る偉大なる人物（即ちゲエテ）へと、いつもわれらを連れ歸るのである。彼の作品のいづれもが、これら凡べての作のうちに現存するこの人格を指し示す。彼は人間と事物とを、公平純眞にわれらの身柄に對するそれの關係より離脱して、われらの上に働かしむるように、生をそれの充實と調和とに於て、生そのものから理解するように、また各々の運命や各々の損失に、新しい快活な面して徹底せる行爲を對向させるように、われらに敎へるのである。克服し、忘却し、自らを改善する彼の力は、單に彼の著作でわれらに傳はるのみならず、此生活に就てわれらに報告を與ふる凡べてのものから作用するのである。書翰や傳記上の諸勞作を離れて、詩作そのものに就くように、指示する如何なる小言（こごと）も、この關係を轉倒して、ゲエテの生活・天性及び展開を、彼の作品理解の手段にまで貶黜することは出來ないであらう。何となれば、人間がその生涯の勞作に於て終局的に意慾したるものはまた、彼の日（彼の生涯）が過ぎ去つたときに、われらを彼に引きつけ、そしてわれらの眼を最終的に確把するものだからである。

ゲーテ

夏目書店

定價金拾貳圓（税込）

昭和二十一年五月十日初版印刷
昭和二十一年五月十五日初版發行

譯者　佐久間政一

發行者　夏目正三
東京都板橋區練馬南町一ノ三四八三

印刷者　田代伯文
東京都板橋區板橋町三ノ六四

製本者　加藤春三
東京都板橋區板橋町三ノ二三一

發行所　夏目書店
東京都板橋區練馬南町一ノ三四八三
（會員番號A二二一〇〇二）

1007
49
940.28
P74

22年 1月14日 77

閱九 閱八 閱五 閱八 閱六

閱覽濟

終

夏目書店